高松市埋蔵文化財調査報告　第 127 集

高松市立林小学校校舎建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

林宗高遺跡

2010 年 3 月

高 松 市 教 育 委 員 会

例　　言

1　本書は，林小学校校舎建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり，林宗高遺跡の報告を収録した。

2　発掘調査地及び調査期間，調査面積は，次のとおりである。
調 査 地　　高松市林町　高松市立林小学校地内
調査期間　　平成 21 年 4 月 13 日～6 月 6 日
調査面積　　430㎡

3　現地調査は，高松市教育委員会教育部文化財課文化財専門員　高上拓が担当した。

4　整理作業は高上が担当した。

5　本報告書の執筆・編集は高上が担当した。

6　発掘調査から整理作業，報告書執筆を実施するにあたって，下記の関係諸機関ならびに方々から御教示及び御協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。
高松市立林小学校

7　標高は東京湾平均海面高度を基準とし，図中方位は座標北を指す。なお，これらの数値は世界測地系第Ⅳ系にしたがった。

8　出土遺物の実測図は，土器やその他土製品等は１/４，遺構の縮尺については図面ごとに示している。土器実測図中で，土師質土器は断面白抜き，須恵質土器は断面黒塗り，緑釉陶器はアミカケで表す。また，石器実測図中で現代の折損は黒で塗り潰している。

9　プラントオパール分析および花粉分析を株式会社パリノ・サーヴェイに，遺物の写真撮影を西大寺フォトに委託した。

10　発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

目　　次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　周辺における既往の調査 …… 1
　第３節　調査日誌 …… 4
　第４節　整理作業の体制と日程 …… 4
　第５節　林小学校生徒による
　　発掘調査体験・現場見学 …… 5
第Ⅱ章　地理的・歴史的環境
　第１節　地理的環境 …… 6
　第２節　歴史的環境 …… 6
第Ⅲ章　調査の概要
　第１節　調査方法 …… 9
　第２節　調査区の概要 …… 9
　第３節　基本層序 ……10
第Ⅳ章　調査の成果
　第１節　弥生時代 ……14
　第２節　古代 ……30
　第３節　近世以降 ……41
第Ⅴ章　自然科学的分析
　第１節　プラント・オパール分析 ……44
　第２節　花粉分析 ……48
第Ⅵ章　まとめ
　第１節　古代の遺構と調査地帯付近の地割 …53
　第２節　土地利用の変遷 ……55

挿　図　目　次

Fig. 1　林宗高遺跡と周辺の遺跡分布図 …… 2
Fig. 2　高松平野の地形図と遺跡位置図 …… 7
Fig. 3　調査区配置図 …… 9
Fig. 4　撹乱層出土遺物 ……10
Fig. 5　調査区北壁・南壁断面図 ……12
Fig. 6　Fig. 4 －Ｈ１層出土遺物 ……13
Fig. 7　出土層位不明遺物 ……13
Fig. 8　SR1 下層検出状況 ……15
Fig. 9　SR1 下層出土遺物① ……17
Fig. 10　SR1 下層出土遺物② ……18
Fig. 11　SR1 下層出土遺物③ ……19
Fig. 12　SR1 下層出土遺物④ ……20
Fig. 13　SR1 下層出土遺物⑤ ……21
Fig. 14　SR1 下層出土遺物⑥ ……22
Fig. 15　SR1 下層出土遺物⑦ ……23
Fig. 16　SR1 下層出土遺物⑧ ……24
Fig. 17　SR1 下層出土遺物⑨ ……25
Fig. 18　SR1 下層出土遺物⑩ ……26
Fig. 19　SR1 下層検出中出土土器 ……28
Fig. 20　SR1 下層検出中出土土器 ……29
Fig. 21　第１遺構面および遺構検出状況 ……31
Fig. 22　SR1 上層（第１遺構面）出土遺物 ……32
Fig. 23　SA1 平・断面図 ……33
Fig. 24　SB1 平・断面図 ……34
Fig. 25　SD1 ～４平・断面図 ……36
Fig. 26　SD5 ～８平・断面図 ……37
Fig. 27　土手状遺構平・断面図 ……38
Fig. 28　土坑・ピット出土遺物 ……39
Fig. 29　土坑・ピット平・断面図 ……40
Fig. 30　近世以降遺構平・断面図 ……42
Fig. 31　近世以降遺構配置図 ……43
Fig. 32　林宗高遺跡における
　　プラント・オパール分析結果 ……44
Fig. 33　林宗高遺跡における花粉ダイアグラム…49
Fig. 34　調査区の標高と地形の変化 ……54
Fig. 35　調査地週辺の微地形復元図と
　　林宗高遺跡位置図 ……55
Fig. 36　工事立会対象地の調査範囲と
　　調査地周辺の微地形復元 ……56

挿　表　目　次

Tab.　1　整理作業工程表 …… 4
Tab.　2　基準点座標一覧表 …… 9
Tab.　3　プラント・オパール分析結果 ……46
Tab.　4　花粉分析結果 ……51
Tab.　5　出土遺物観察表 ……58

図　版　目　次

PL.　1　遺跡説明の様子
PL.　2　発掘調査体験の様子
PL.　3　植物珪酸体（プラント・オパール）
PL.　4　林宗高遺跡の花粉
PL.　5　弥生土器集合
PL.　6　1　第１遺構面全景（北から）
　　2　第１遺構面東側遺構検出状況（北から）
　　3　第１遺構面西側遺構検出状況（北から）
PL.　7　1．第２遺構面検出（北から）
　　※ピットは上面からの掘込
　　2．SR １遺物集中（北西から）
　　3．SR １遺物集中（南東から）
PL.　8　1．SR １遺物出土状況①（南から）
　　2．SR １遺物出土状況②（南から）
　　3．SR １遺物出土状況③（南から）
　　4．SR １遺物出土状況④（南から）
　　5．SR １遺物出土状況⑤（南から）
　　6．SR １遺物出土状況⑥（東から）
　　7．SR １完掘状況（北西から）
PL.　9　1．調査区北壁西半断面（南から）
　　2．調査区北壁東半断面（南から）
　　3．調査区南壁西半断面（北から）
　　4．調査区南壁東半断面（北から）
　　5．調査区東壁断面（南西から）
　　6．調査区西壁断面（南東から）
　　7．近世以降の撹乱層（南西から）
　　8．調査区南東壁断面（北西から）
PL.　10　1　SD １・２完掘状況（南から）
　　2　SD ３・４完掘状況（南から）
　　3　SD ５・６完掘状況（南から）
　　4　SD ７・８完掘状況（北から）
PL.　11　1　SD １断面（南から）
　　2　SD ２断面（南から）
　　3　SD ３断面（南から）
　　4　SD ４断面（南から）
　　5　SD ５断面（南から）
　　6　SD ６断面（南から）
　　7　SD ７断面（南から）
　　8　SD ８断面（南から）
PL.　12　1　SX ２（土手状遺構）検出状況（南から）
　　2　調査区北壁検出 SX ２断面
　　3　調査区南壁検出 SX ２断面
PL.　13　1　緑釉陶器出土状況
　　2　土錘出土状況
　　3　SX １断面（南から）
　　4　SX １完堀（南から）
　　5　北拡張区第１遺構面遺構検出状況
　　（南から）
PL.　14　1．SR １下層断割（西から）
　　2．SR １下層断割北壁断面（東から）
　　3．SR １下層断割南壁断面（西から）
　　4．北拡張区全景（北東から）
　　5．北拡張区全景（南から）
　　6．北拡張区西壁断面（南東から）
　　7．北拡張区東壁断面（南西から）
　　8．調査終了後風景（西から）
PL.　15 ～ 19　出土遺物写真

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

本調査地は，高松市立林小学校新校舎建設予定地にあたる。本市教育委員会総務課（以下教委総務課と呼称）により，当地での校舎建設事業が計画されたため，本市教委文化財課が着工に先立ち平成 20 年７月 28 日に試掘調査を実施した。その結果，弥生時代を中心とした時期の埋蔵文化財の包蔵を確認したため，香川県教育委員会に報告したところ，周知の埋蔵文化財包蔵地「林宗高遺跡」として登録された。平成 21 年度に校舎建設工事に着工する予定であったため，平成 21 年２月５日付けで埋蔵文化財保護法第 94 条に基づく発掘通知が提出され，本市教委から県教委へ進達したところ，同月 17 日付けで「発掘調査」の行政指導があった。これを受けて文化財課は教委総務課と協議を行い，校舎建設前に発掘調査を実施し，記録保存を行うことで合意したため，平成 21 年４月 14 日から同年６月６日にかけて，発掘調査を実施した。

また発掘調査開始前に，校舎建設の付随工事である渡り廊下建設予定地においても掘削工事を実施する旨の報告を教委総務課より受けたため，６月４～６日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果，南側においては埋蔵文化財の包蔵状況を確認したが，北側は既設のガス管・配水管などが縦横に配置されており，埋蔵文化財の包蔵状況を確認することはできなかった。この試掘調査の結果を県教委に報告したところ，渡り廊下建設予定地の南側は新たに埋蔵文化財包蔵地として登録され，北側については渡り廊下の建設工事着工時に「工事立会」の対応をとるようにという行政指導を受けた。これに基づき７月２９日に工事立会を実施した結果，ガス管等既設の構造物ですでに大きく削平されており，埋蔵文化財の包蔵状況は確認できなかった。

以上の経緯をまとめると，今回の調査はまず周知の埋蔵文化財包蔵地である新校舎建設予定地に対する発掘調査を行ったのち，渡り廊下建設予定地の南側は試掘調査で，北側は工事立会でそれぞれ必要な記録保存措置をとることとなった。なお，渡り廊下建設予定地北側で実施した工事立会の内容については埋蔵文化財包蔵地とは認められなかったため，本書には掲載していない。

第２節　周辺における既往の調査

林宗高遺跡は行政区分としては林町 1108 番地１に所在し，地勢的には高松平野中央部のやや南東よりに位置する。本遺跡の周辺では，近年，高松東道路建設事業や空港跡地開発事業に伴う調査をはじめとして，大規模開発が数多くなされており，それらの事業に伴う調査例が数多く蓄積されている。また，弘福寺領讃岐国山田郡田図の調査（藤井ほか 1992・山本ほか 1999）に伴い，地形の変遷や古代の土地利用の詳細など，多岐にわたる調査･分析の対象となっており，高松平野でも調査の進展している地域であるといえる。しかし細かく見ると，本調査地の周囲 250 mではこれまで発掘を伴う調査例がなく，調査の部分的な空閑地であった。本書に紹介する林宗高遺跡の調査内容は，こうした調査の隙間を埋めるという意味でも重要である。

Fig. 1 に周辺の遺跡分布図を掲載したが，その中でも発掘調査の成果が報告書として刊行されているものについて以下に列記している。各調査の詳細はそれぞれの発掘調査報告書を参照していただきたい。なお，遺跡名の頭につく数字は Fig. 1 中の遺跡番号に対応する。

1. 林宗高遺跡 2. 鹿腹遺跡 3. 天満・宮西遺跡 4. 松縄城跡 5. 木太中村遺跡 6. 陣内城跡 7. 木太本村Ⅱ遺跡
8. 白山神社古墳 9. 木太本村遺跡 10. 向上跡 11. 佐藤城跡 12. キモンドー遺跡 13. 松縄下所遺跡
14. 境目・下西原遺跡 15. 大荒神古墳 16. 上西原遺跡 17. 大池遺跡 18. 弘福寺領田図北地区比定地 19. 木太町九区遺跡
20. 林浴遺跡 21. 林下所遺跡 22. 林下所遺跡 23. 林下所・木太今村遺跡 24. 林下所遺跡 25. 林下所・六条乾遺跡
26. 林下所遺跡 27. 上天神遺跡 28. 太田下・須川遺跡 29. 蛙股遺跡 30. 居石遺跡 31. 井手東Ⅱ遺跡 32. 井手東Ⅰ遺跡
33. 浴・長池Ⅱ遺跡 34. 浴・長池遺跡 35. 浴・松ノ木遺跡 36. 林・坊城遺跡 37. 六条・上所遺跡 38. 太田城跡
39. 汲仏遺跡 40. 多肥下町下所遺跡 41. 天皇西原遺跡 42. 宗高坊城遺跡 43. 六条西村遺跡 44. 六条城跡
45. 北原遺跡 46. 六条上川西遺跡 47. お茶荒神 48. 松林遺跡 49. 凹原遺跡 50. 日暮・松林遺跡 51. 多肥松林遺跡
52. 多肥宮尻遺跡 53. 池の内遺跡Ⅱ 54. 池の内遺跡Ⅰ 55. 弘福寺領田図南地区比定地 56. 空港跡地遺跡 57. 畑遺跡
58. 拝師廃寺 59. 一角遺跡 60. 公務員宿舎遺跡 61. 上林遺跡 62. 宮西・一角遺跡 63. 多肥平塚遺跡 64. 多肥廃寺

Fig. 1　林宗高遺跡と周辺の遺跡分布図（縮尺＝1/25,000）

1．本書

2．山元敏裕 1993『伏石・鹿原遺跡』高松市内埋蔵文化財試掘調査概報（平成３年度，４年度）高松市教育委員会

3．川畑聰編 2002『天満宮西遺跡～集落・水田編～』高松市教育委員会
川畑聰・小川賢編 2004『天満・宮西遺跡～旧河道編上西原遺跡～第２次調査～』高松市教育委員会

4・10・11・38・44.
香川県教育委員会 2003『香川県中世城館詳細分布調査報告』

5．大嶋和則・中西克也編 2001『木太中村遺跡』高松市教育委員会
木下晴一編 2009『木太中村遺跡文京町二丁目遺跡』香川県教育委員会

6．大嶋和則編 2001『神内城跡』高松市内遺跡発掘調査概報－平成 12 年度－高松市教育委員会
川畑聰編 2005『木太町神内城跡～第２次調査～』ガソリンスタンド建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書出光興産株式会社　高松市教育委員会

7．木下晴一編 1998『木太本村Ⅱ遺跡』香川県教育委員会

8．中西克也編 2007『白山神社古墳』高松市教育委員会

12. 山本英之・中西克也編 1999『キモンドー遺跡』高松市教育委員会

13. 川畑聰編 2001『松縄下所遺跡』高松市教育委員会

14. 山本英之・中西克也編 1998『境目・下西原遺跡』高松市教育委員会

16. 川畑聰･末光甲正編 2000『上西原遺跡附汲仏遺跡』高松市教育委員会

20～26,43・46
小川賢編 2004『津内・東井坪遺跡，中森遺跡，林浴遺跡，林下所遺跡，林下所・木太今村上所遺跡，林下所・六条乾遺跡，六条上川西遺跡，六条西村遺跡』高松市教育委員会

27. 大久保徹也・森格也編 1995『上天神遺跡』香川県教育委員会ほか

28. 北山健一郎編 1995『太田下・須川遺跡』香川県教育委員会ほか
小川賢・高上拓ほか編 2009『太田下・須川遺跡』高松市教育委員会

29. 山元敏裕ほか編 1995『蛙股遺跡』高松市教育委員会ほか

30. 藤井雄三・山元敏裕編 1995『居石遺跡』高松市教育委員会ほか

31. 山本英之・山元敏裕・中西克也編 1995『井手東Ⅱ遺跡』高松市教育委員会ほか

32. 山元敏裕ほか編 1995『井手東Ⅰ遺跡』高松市教育委員会ほか

33. 山元敏裕編 1994『浴・長池Ⅱ遺跡』高松市教育委員会他

34. 山本英之・山本敏裕編 1993『浴・長池遺跡』高松市教育委員会ほか

35. 山元敏裕編 1994『浴・松ノ木遺跡』高松市教育委員会他

36. 宮崎哲治編 1993『林・坊城遺跡』香川県教育委員会
信里芳紀・山元素子編 2004『中森遺跡 林・坊城遺跡Ⅱ 東山崎・水田遺跡Ⅱ』香川県教育委員会ほか

37. 北山健一郎編 1995『六条・上所遺跡』香川県教育委員会ほか

38. 川畑聰 2009「太田城跡」『香川県文化財年報』平成 19 年度　香川県教育委員会

39. 川畑聰･末光甲正編 2000『上西原遺跡附汲仏遺跡』高松市教育委員会

42. 小川賢・山元敏裕編 2004『宗高坊城遺跡』高松市教育委員会

48. 大嶋和則編 1996『松林遺跡』高松市教育委員会
大嶋和則編 2004『松林遺跡（第２次調査)』高松市教育委員会・株式会社ユーリックホーム

49. 川畑聰編 2001『凹原遺跡』高松市教育委員会

50. 山本英之・中西克也編 1997『日暮・松林遺跡』高松市教育委員会
大嶋和則編 2003『日暮・松林遺跡（済生会)』高松市教育委員会・社会福祉法人恩賜財団済生会支部香川県済生会
川畑聰・小川賢・片桐節子編『日暮・松林遺跡』フィットネスクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　高松市教育委員会・株式会社象企画
大嶋和則編 2005『日暮･松林遺跡（済生会特養ホーム)』高松市教育委員会・社会福祉法人恩賜財団済生会支部香川県済生会
渡邊誠編 2007『日暮・松林遺跡（共同住宅)』株式会社穴吹工務店・高松市教育委員会

51. 山下平重編 1999『多肥松林遺跡』香川県教育委員会他
大嶋和則編 2006『多肥松林遺跡（電気店)』高松市教育委員会・株式会社ビッグ・エス

52. 川畑聰・小川賢編 2004『多肥宮尻遺跡』高松市教育委員会・株式会社西日本住建
大嶋和則編 2006『多肥宮尻遺跡（衣料品販売店舗)』高松市教育委員会・株式会社しまむら

55. 藤井雄三ほか編 1992『讃岐国弘福寺領の調査』

弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書高松市教育委員会
山本英之ほか編 1999『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』第２次弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書高松市教育委員会
56. 廣瀬常雄・西岡達哉編 1996『空港跡地遺跡Ⅰ』香川県教育委員会ほか
蔵本晋司・白石純・本田光子編 1997『空港跡地遺跡Ⅱ』香川県教育委員会ほか
森下友子・白石純編 1997『空港跡地遺跡Ⅲ』香川県教育委員会ほか
片桐孝浩編 1997『空港跡地遺跡（J 地区）』香川県教育委員会ほか
佐藤竜馬編 2000『空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会
木下晴一・三辻利一編 2002『空港跡地遺跡Ⅴ』香川県教育委員会ほか
山元素子編 2003『空港跡地遺跡（K 地区）』香川県教育委員会ほか
蔵本晋司・真鍋昌宏・松本和彦編 2003『空港跡地遺跡Ⅵ（G 地区）』香川県教育委員会ほか
西岡達哉編 2004『空港跡地遺跡Ⅶ』香川県教育委員会他
乗松真也（編）・濱野圭司・真下拓哉 2004『空港跡地遺跡Ⅷ』香川県教育委員会ほか
森格也編 2007『空港跡地遺跡Ⅸ』香川県教育委員会ほか
59. 大嶋和則編 2000『一角遺跡』高松市教育委員会
60. 北山健一郎 1992「公務員宿舎遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』平成３年度
62. 山元敏裕編 2000『宮西・一角遺跡』高松市教育委員会
川畑聰・中西克也編 2001『宮西・一角遺跡（平成 11・12 年度）』 高松市教育委員会

第３節　調査日誌

４月 13 日　　調査区仮囲いフェンス搬入・設置開始
４月 14 日　　仮囲いフェンス設置完了。重機掘削開始
４月 16 日　　調査区東半にて第１遺構面を検出
４月 27 日　　第１遺構面の記録作業を完了し，下位の遺構面を目指し掘削を開始。
４月 28 日　　自然河川から多量の弥生土器を検出する。
５月 19 日　　土器検出完了。
５月 25 日　　出土範囲及び出土状況の記録をとり，取上げを開始。
５月 27 日　　林小学校保護者を対象に現場説明会を開催。38 名の参加を得た。
６月 １ 日　　遺物取上げ完了。記録作業を行う。
６月 ３ 日　　自然河川の堆積状況を確認するため，東西方向に断割りを行った。
６月 ４ 日　　調査区東半から埋め戻しを開始。渡り廊下建設予定地の確認調査開始。
６月 ６ 日　　渡り廊下建設予定地の調査完了。埋め戻し終了。

第４節　整理作業の体制と日程

整理作業は６月１日から開始し，２月 29 日に終了した。進捗状況は下表のとおりである。

Tab. 1　整理作業工程表

	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
洗浄											
接合・復元											
遺物実測											
遺構図レイアウト											
遺構図トレース											
遺物レイアウト											
遺物トレース											
観察表作成											
遺物写真撮影											
写真レイアウト											
自然科学的分析（委託）											
原稿執筆											
編集											

第５節　林小学校生徒による発掘調査体験・現場見学

発掘調査地が小学校の校庭ということもあり，調査開始時より生徒および学校職員から発掘調査に対して高い関心を得ていた。また本市教委としても埋蔵文化財の調査成果を地域に還元することは望ましいことであるため，学校側と協議を行い，生徒を対象とした発掘調査体験ならびに遺跡見学を実施した。

日程　５月 ８ 日　６年生による発掘調査体験　　５月 15 日　　２年生による現場見学
　　５月 14 日　３年生による発掘調査体験　　５月 19・20 日 ５年生による現場見学

内容　６年生による発掘体験は，クラスごとに２回に分けて実施した。内容は，遺物の集中する自然河川中の土器溜りにおける土器の検出である。この際，誤って遺物を破損することの無いよう，使用する道具は竹べらと移植用スコップに限定した。また，作業に当たっては文化財課の専門員をはじめ，作業員を各所に配し，随時指導を行った。一方３年生による発掘調査体験では，対象者の年齢を考慮した上で，排土中に混入した遺物の取り上げを中心に作業を実施した。使用した道具および指導体制は６年生の時と同様である。

小結　発掘調査体験は，それぞれ１回 45 分という短い時間であったが，児童達の積極的な参加を得ることができ，有意義なものになったと考えられる。ただし，発掘調査体験の後に，アンケートや作文等の課題を用意するなど，体験内容を整理し，さらに理解を深めるための過程を用意することができなかった。埋蔵文化財行政における教育普及活動の占める比重は，今後ますます増大するものと考えられる。より効果的な活用方法を提案することを目指したい。

PL. 1　遺跡説明の様子

PL. 2　発掘調査体験の様子

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松市は香川県の県都であり，面積約 375 ｋ㎡の市域に約４２万人もの人々が暮らす，四国地方有数の都市である。平成の大合併により近隣の庵治町・牟礼町・塩江町・香川町・香南町・国分寺町と合併したことで，阿讃山脈から瀬戸内海にまで及ぶ広大な市域を有することとなった。これにより北は備讃瀬戸で岡山県と，南は阿讃山脈で徳島県とそれぞれ境を接している。

本遺跡の立地する高松平野は，平野を南北に貫く複数の河川の堆積作用により形成されたものである。平野には本津川，香東川，御坊川，詰田川，春日川，新川などの河川が流れるが，中でも香東川の堆積作用が最も強く，春日川の西側付近まで香東川の堆積作用による平野が広がる。また，これらの河川はいずれも近世に大規模な改変を受けている。香東川は現在では石清尾山山塊の西側を流れているが，古絵図などには本来山塊の東側を流れていた事が記されている。また現在は埋没しているが，平野中央部の林町から木太町にかけての範囲で複数の旧河道が存在したことが指摘されている。林宗高遺跡の周辺でも，長池や大池などを結ぶ旧河道の存在が推定されており，本遺跡の発掘調査でも北西に向かう旧河道を検出している。

第２節　歴史的環境

旧石器時代～縄文時代　高松平野における旧石器時代の生活の痕跡は，久米池南遺跡，諏訪神社遺跡，雨山南遺跡，中間西井坪遺跡，香西南西打遺跡，西打遺跡などで確認されているが，本遺跡の位置する平野中央部付近ではいまだ検出例がない。旧石器時代後期にあたるウルム氷期には，備讃瀬戸が完全に陸化しており，多くの湖沼が存在し大小の河川が流れる盆地であったことが指摘される（長谷川・斉藤 1989）。平野の大部分の堆積はこの後であり，現在この時期の遺跡が検出されるのは平野縁辺部の丘陵上に集中する。

縄文時代の明瞭な遺構や遺物は極めて少ない。平野部での遺跡の増加が顕著に認められるのは晩期以降である。居石遺跡，松林遺跡，川岡遺跡，谷・長池遺跡，上天神遺跡，前田東・中村遺跡，林・坊城遺跡などで晩期の遺構・遺物が検出されている。

弥生時代　縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて，平野部での集落の形成が顕著に認められる。本遺跡周辺でも，谷・長池遺跡，井手東Ⅱ遺跡，上西原遺跡，東中筋遺跡，宗高坊城遺跡など，縄文晩期から継続する遺跡では，小規模区画水田跡など農耕に関する遺構が検出されている。また天満・宮西遺跡，汲仏遺跡では１重～２重の環濠が巡る環濠集落が形成されたことが確認されている。この後，前期末～中期前半に継続する集落は少ない。谷・長池遺跡で前期から中期前葉まで連続した居住が認められるのを除けば，新たに生活の痕跡が認められるのは中期中葉以降である。この時期には段丘化によって平野部の堆積が一気に進行することが指摘されており，こうした自然環境の変動も一因であったと考えられる。上天神遺跡，松林遺跡，松並・中所遺跡などで居住の痕跡が認められる。中期後半～後期前半にかけては，太田下・須川遺跡，上天神遺跡などで集落跡が確認される。後期後半には，凹原遺跡，空港跡地遺跡，日暮・松林遺跡，一角遺跡，天満・宮西遺跡，宗高坊城遺跡などで再度集落が形成され，一部はその後，終末期から古墳時代前期前半まで継続する様子が認められる。弥生時代の高松平野では集落の形成と解体が繰り返し認められ，長期間継続する集落が少ないという特徴が指摘されている。

古墳時代　集落域に関する資料は多くないが，前述のように古墳時代前期前半までは弥生時代終末期から継続する遺跡が認められる。他には空港跡地遺跡，六条・上所遺跡，谷・松ノ木遺跡などで集落跡が確認される。集落域の状況が明らかでない一方，平野縁辺部の丘陵上には数

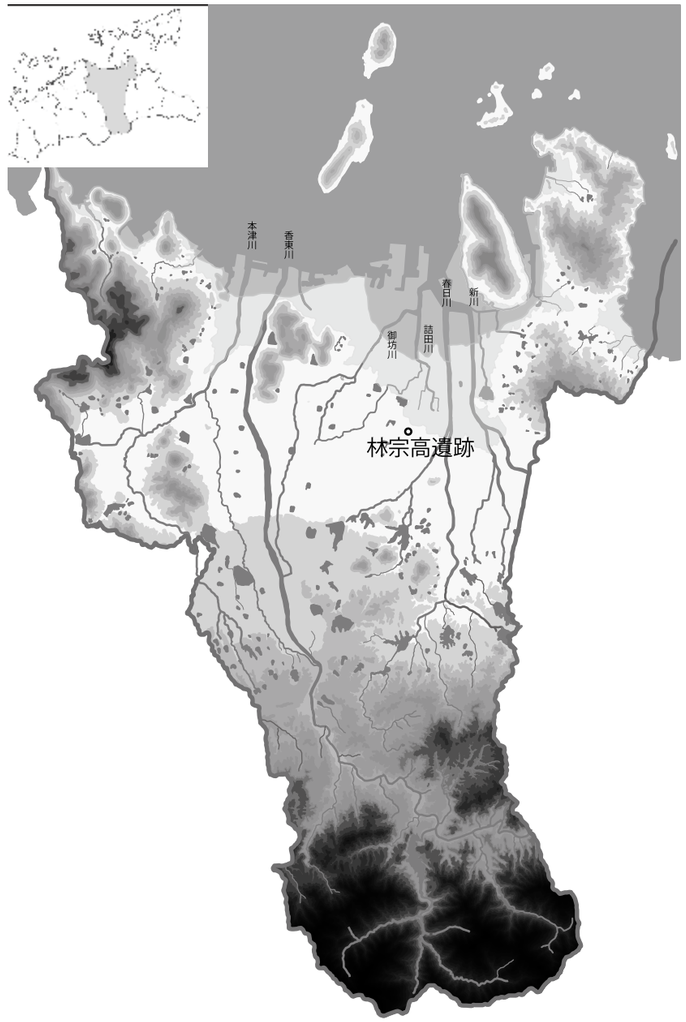


Fig. 2　高松平野の地形図と遺跡位置図

多くの古墳が築造される。高松平野中央部付近では，本遺跡の北西に前期から中期までの累代的な墓域が形成される石清尾山古墳群が存在するほか，平野の東部では高松市茶臼山古墳，南部では船岡山古墳などの有力な古墳が築造される。前期古墳の盛行とは対照的に，今岡古墳などを除いて中期古墳の例は極めて少ない。後期から終末期にかけては，丘陵上に数多くの群集墳が築造され，石清尾山山塊を中心に浄願寺山古墳群，南山浦古墳群などが調査されている。

古代　古代の高松平野は大きく西部の香川郡，東部の山田郡に分割され，平野部のほぼ全面に南北線が東に約９～11°傾く条里地割が分布する。本遺跡周辺では特に弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地における学際的な調査がなされ，当地の土地利用の変遷や条里制地割について重要

な成果が得られた。この条里地割に沿った溝や建物跡が松縄・下所遺跡，空港跡地遺跡，汲仏遺跡などで検出されている。高松平野では古墳時代後期～古代の前半にかけて，それまで集落域の営まれていた微高地が埋没したとされ，それに伴い集落の断絶と形成が認められる。また，発掘調査で全容の知られる例は無いが，周辺では拝師廃寺，多肥廃寺などが古代寺院として知られ，拝師廃寺では平成21年7月に発掘調査が行われた。平成21年度末に報告書が刊行予定である。

中・近世　中世高松の武士としては香西氏・十河氏・由佐氏等が知られ，香西氏の平地の居館である佐料城，詰め城である勝賀城などが知られる。本遺跡周辺ではキモンドー遺跡で佐藤城の堀が検出されている。居住域としては，空港跡地遺跡で古代～中世の集落の変遷が詳細に検討され，当該期の高松平野を考える上で重要な知見が得られている。

天正16（1588）年，豊臣秀吉の家臣，生駒親正により高松城が築城され，城下町が整備される。その後，生駒騒動により生駒家が出羽国に転封されると，寛永19（1642）年，松平頼重が東讃岐12万石を拝領し，高松城主として入封した。松平家は徳川将軍家の親藩として代々藩主をつとめ，明治維新を迎える。

〈主要参考文献〉

金田章裕 1993「讃岐国における条里プランの展開」『古代日本の景観　方格プランの生態と認識』吉川弘文館

柴田博・糸魚川淳二 1989「瀬戸内海と古瀬戸内海」『アーバンクボタ』No.28　株式会社クボタ

高橋学 1995「平地の微地形変化と開発」『講座　文明と環境』6　歴史と気候　朝倉書店

長谷川修一・斉藤実 1989「讃岐平野の生いたち－第一瀬戸内累層群以降を中心として－」『アーバンクボタ』28　株式会社クボタ

山本英之・中西克也編 1992『讃岐国弘福寺領の調査』弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書　高松市教育委員会

渡邊誠 2007「地理的・歴史的環境」『日暮・松林遺跡』共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　高松市教育委員会

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査方法　調査対象地は高松市立林小学校の校庭に位置する，新校舎および渡り廊下建設予定地である。第Ⅰ章で述べたとおり，本書では新校舎建設予定地と渡り廊下建設予定地南側の調査成果を報告する。発掘調査は重機による遺構面までの掘削と，人力による遺構の掘削を基本として行った。記録に際しては３点の基準点を設定し，基準点をもとに図化を行った。各基準点の座標はTab. ２のとおりである。このうち，Ｓ３については調査区からやや離れた位置に設定した予備的な杭であったため，実際の図化と記録に当たってはＳ１とＳ２を基準としている。図面は平面図・断面図ともに縮尺１／２０で作図した。写真撮影は35mmフィルムカメラを主に用い，モノクロ・カラーリバーサルフィルムで記録した。また，補助的にデジタルカメラも用いて記録を行った。

Tab. 2 基準点座標一覧表

	S1	S2	S3
X	144436.506	144432.358	144457.082
Y	52435.845	52463.536	52467.239

（数値は世界測地系第Ⅳ系による）

第２節　調査区の概要　調査地は南北長約13m，東西長約26ｍの長方形の北辺に，東西４ｍ，南北約６ｍの長方形が接した形状を呈する。大きな長方形は新校舎建設予定地で，小さな長方形が渡り廊下建設予定地である（Fig. ３）。以下では記述が煩雑になるのを避けるため，新校舎建設予定地を調査区，渡り廊下建設予定地南半を北拡張区と呼称することとする。

両者が接するのは調査区西端から東へ４～８ｍの範囲である。調査区南西隅は調査時の移動のために階段状に残しており，最終段階で掘削を行った。調査区中央やや南よりでは，東西方向に試掘トレンチの痕跡が残る。

前節にて述べたとおり，調査に当たり３点の基準点を設定して記録を行った。以下，本報告で地点を呼称する際には，図中に示した座標方位とは若干ずれるが，Ｓ１－Ｓ２主軸を東西方向，それに直行する方向を南北方向とみなし，東西方向の位置関係はＳ１から北あるいは南に○ｍ，南北方向についてはＳ１－Ｓ２主軸より東あるいは西に○ｍと表記する。

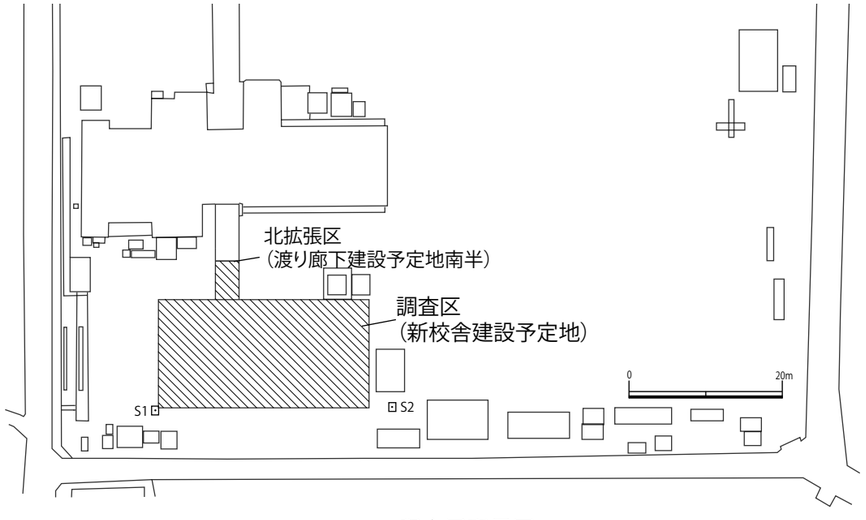


Fig. ３　調査区配置図

第３節　基本層序

調査区は東西方向に長い平面形であるが，調査時の所見から東西方向で原地形が大きく変化することが明らかになった。このため，ここでは調査区の南壁・北壁の土層断面を中心に基本層序の記述を行うこととする。

近代以降の撹乱　調査地は小学校の校庭であり，当然現地表面はグラウンド造成時の花崗土である。花崗土を掘削すると，各所で近代以降の廃棄物を多量に含んだ撹乱層（Fig. 5 － B 層）が見つかった。撹乱層中にはコンクリートブロックや瓦など建造物関係の廃棄物のほか，炭片や蝋石などを多量に含んでいた。調査地付近にはかつて小学校に隣接して幼稚園が建設されていたという地元の方の証言から，その当時のごみ廃棄穴および解体時の廃棄跡であると考えられる。この近代以降の撹乱は特に調査区の東側を中心に顕著に認められ，広範囲で遺構面を削平している状況が確認できた。平面的に見ると，Ｓ１から東へ16ｍの地点よりも東側では，遺構面である Fig. 5 － F･H 層がほとんど削平されている。南壁の断面図では大きな削平は認められないが，調査時の所見として限りなく南壁に近い地点まで撹乱が平面的に及んでいたことを確認している。調査区北壁のＢ層を清掃中に，中世に属する土器片を数点検出した（Fig. ４－１・２）。１は土師器土釜の口縁部である。２は土師器足釜の脚部である。撹乱によって削平された調査区東側に中世の遺構が存在した可能性が高い。また，所属時期は不明であるが，同じ撹乱層より石臼が出土している（Fig. ４－Ｓ１）。

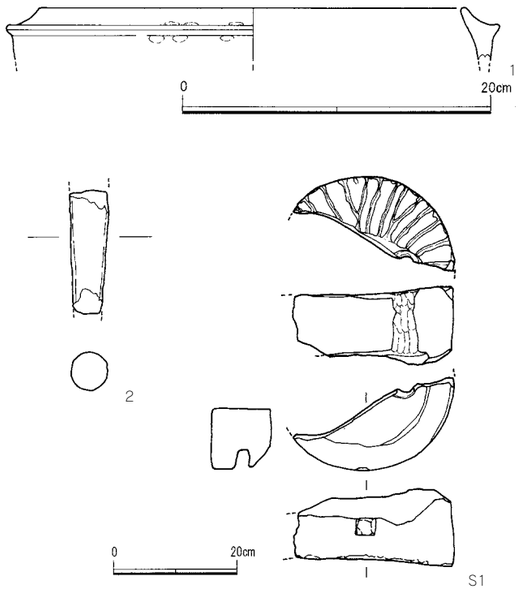
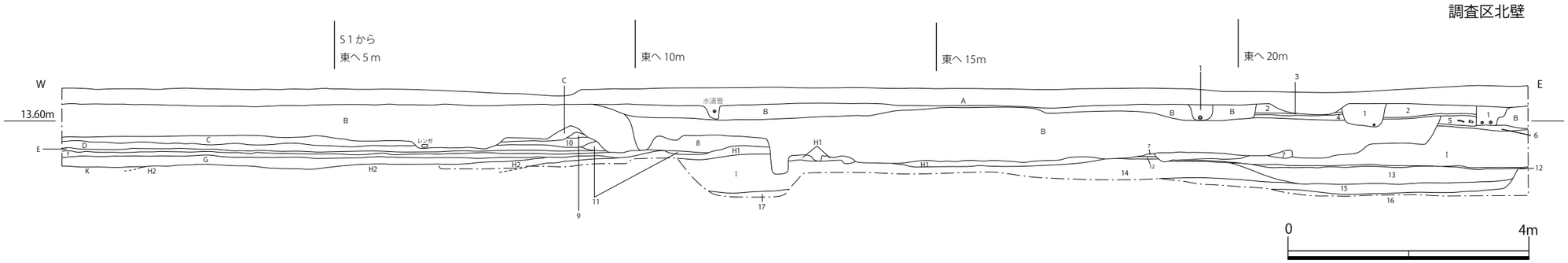


Fig. ４　撹乱層出土遺物（縮尺＝土器 1/4，石器 1/10）

第１遺構面　調査区西側で現地表面下約1.2ｍの深度で検出した遺構面である（Fig. 5 － F 層）。主に灰色シルト～極細砂で構成され，古代の遺構面となっている。調査区西側は弥生時代の自然河川 SR １下層が埋没してできた低地になっており，その低地上にさらに堆積作用が働き，形成された平坦面が第１遺構面である。第１遺構面の検出範囲が自然河川の流域に重複する様相が認められるため，第１遺構面の堆積にも自然河川 SR １の堆積作用が大きく影響を与えた可能性が考えられる。従って，第１遺構面は遺構面であると同時に SR １上層として把握し，報告を行っている。なお，調査区中央の微高地よりも東側にはこの層は認められない。

SR １下層埋土　調査区西側で第１遺構面の下層で検出した，多量の弥生土器片を含む黒色粘土層である（Fig. 5 － G 層）。土器の検出状況は写真図版に掲載している（PL ７・８）。

第２遺構面　調査地中央で黄褐色シルトを中心とした層（Fig. 5 － H 層）が，西側へ下降し堆積する状況を確認した。後述する自然河川の基盤層であり，第２遺構面とした。主に土色の違いからＨ１層とＨ２層に分層でき，Ｈ１層が上層にあたる。



調査区北壁土層注記

近代以降の撹乱
1　10YR5/3 黄褐色細砂～粗砂に花崗土を斑に 5% 含む　水道管布設時の撹乱
2　2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂～中砂
3　10YR2/3 黒褐色極細砂～粗砂
4　2.5Y6/3 にぶい黄色極細砂～細砂
A　花崗土
B　撹乱土　コンクリート片・煉瓦片・瓦片・礫など多量に含む
造成時の基盤
5　2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂～細砂に陶磁器、土器片を含む
6　10YR4/4 褐色極粗砂に径 1 ～ 3 ㎝大の円礫を 80% 含む
7　10YR5/4 にぶい褐色細砂に明黄褐色土・灰色土を斑状に 10% 含む
8　2.5Y7/2 灰黄色シルトに径 5 ㎝程度の円礫を 5%、近世陶磁器含む
土手状遺構の構成土
9　2.5Y6/2 灰黄色シルトに 2.5Y6/6 明黄褐色土を斑に 50% 含む
10　7.5Y5/1 灰色粘土～シルト
11　2.5Y5/3 黄褐色シルトに径 5 ㎝程度の円礫を 20% 含む
自然河川埋土の礫層
12　10YR4/3 にぶい黄褐色極粗砂に径 1 ～ 2 ㎝大の円礫を 80% 含む
13　10YR5/4 にぶい褐色極粗砂に径 5 ～ 10 ㎝大の円礫を 80% 含む
14　10YR5/3 にぶい黄褐色～ 10YR4/4 褐色を主体とする径 10 ～ 30 ㎝大の礫層、
　本来はより細分可と思われるが礫の比率が高すぎて不明
15　10YR5/3 にぶい黄褐色～ 10YR4/4 褐色礫層
16　10YR4/3 暗褐色極粗砂～中粒砂に径 5 ～ 10cm 大の円礫を 80%含む
17　2.5Y6/2 灰黄色極粗砂に径 5 ㎝ 程度の円礫 10%含む
旧耕作土
C　2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土に Fe 少量沈着
D　7.5Y5/1 灰色粘土に Fe 多く沈着
E　10Y6/1 灰色シルト～細砂に明黄褐色土を斑に 50% 含む
第１遺構面
F　5Y5/1 灰色シルト～極細砂
第２遺構面
H1　2.5Y5/2 褐色極細砂～細砂に径 2 ～ 5 ㎝大の円礫を 30%、土器片少量含む
H2　7.5YR5/2 灰褐色シルト～極細砂に Fe を斑に 30% 沈着
自然河川 SR1 埋土
G　10YR2/1 黒色粘土～シルトに径 2 ㎝程度の風化礫、弥生土器、須恵器を含む
K　2.5Y3/1 黒褐色粘土に多量の弥生土器を含む

調査区南壁土層注記

上面の耕作土
1　2.5Y7/8 黄色極細砂～細砂
2　2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂
3　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～極細砂
4　2.5Y6/4 にぶい黄色シルト～極細砂
5　5Y5/3 灰オリーブ色シルト～極細砂に G 層ブロックを 2% 含む
6　2.5Y5/4 黄褐色極細砂に有機物を少し含む
7　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト～極細砂
8　10YR5/2 灰黄褐色シルト～細砂
土手状遺構の構成土
9　2.5Y5/3 黄褐色シルト～極細砂に土器の細片径 1 ㎝大の円礫を 10% 含む
10　2.5Y6/2 灰黄色極細砂に Fe を斑状に 20% 沈着
11　2.5Y3/2 黒褐色・2.5Y5/4 黄褐色シルト～極細砂に 10YR6/1 褐灰色土を斑に混じる
12　10YR5/3 にぶい黄褐色シルトに径 3 ㎝大の円礫を少量含む、Fe 沈着
遺構埋土
13　10YR3/3 暗褐色砂層に径 5 ㎝以下の円礫を 20% 含む
14　10YR4/4 褐色シルト～細砂
15　10YR3/4 暗褐色極細砂～細砂
16　5Y6/2　灰オリーブ　シルト～極細砂
17　2.5GY4/1 暗オリーブ灰色極細砂～細砂に G 層・F 層をブロック状に 5% 含む
遺構面
18　10YR6/3 にぶい黄橙色極細砂～細砂に径 2 ㎝大の礫を 20% 含む
19　10YR5/3 にぶい黄褐色細砂～中砂に径 10 ～ 20 ㎝大の角のとれた河原石を 50% 以上含む
20　10YR5/4 にぶい黄褐色極粗砂
砂礫層
21　10YR4/4 褐色砂層に径 1 ～ 5 ㎝以下の礫を 10%
22　10YR5/4 にぶい黄褐色極粗砂
23　10YR4/4 褐色砂層に径 1 ㎝以下の円礫を 80% 含む
24　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトに径 5 ～ 20 ㎝大の礫を 50% 以上含む
25　2.5Y7/2 灰黄色細砂～粗砂に Fe 少し沈着
26　10YR4/4 褐色砂層に径 1 ㎝以下の円礫を 80% 含む
27　10YR5/3 にぶい黄褐色砂層
I　10YR5/3 にぶい黄褐色～ 10YR4/4 褐色を主体とする、径 10 ～ 30 ㎝大の礫層、
　(本来はより細分可と思われるが礫の比が高すぎて不明)
旧耕作土
C　2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土に Fe 少量沈着
D　7.5Y5/1 灰色粘土に Fe 多く沈着
E　10Y6/1 灰色シルト～細砂に 2.5Y6/8 明黄褐色土を斑に 50% 含む
第１遺構面
F　5Y5/1 灰色シルト～極細砂
第２遺構面
H1　2.5Y5/2 褐色極細砂～細砂に径 2 ～ 5 ㎝大の円礫を 30%、土器片少量含む
H4　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～極細砂に Fe を斑に 50% 沈着
L　7.5YR5/1 褐灰色シルト～極細砂に 2.5Y7/6 明黄褐色土を斑に 20%、K 層を斑に 20% 含む
自然河川 SR1 埋土
G　10YR2/1 黒色粘土～シルトに径 2 ㎝程度の風化礫、弥生土器、須恵器を含む
K　2.5Y3/1 黒褐色粘土に多量の弥生土器を含む

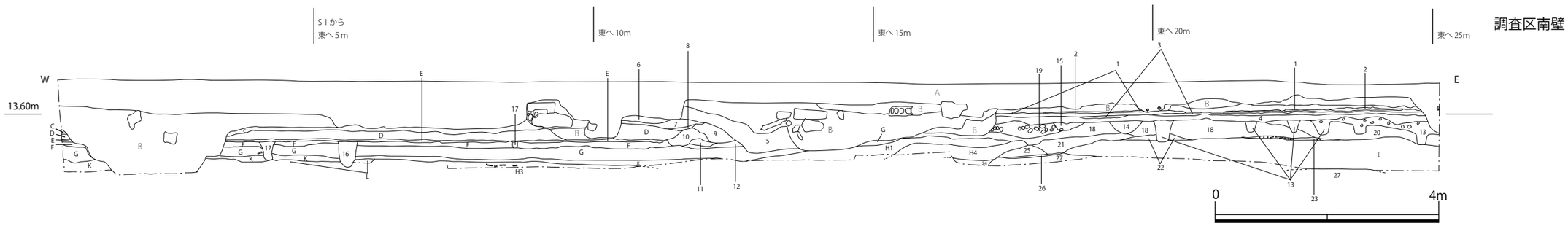


Fig.5　調査区南壁・北壁断面図（縮尺＝1/80）

なお，Ｓ１から東へ16ｍ，北へ１ｍの地点付近で，Ｈ１層の最高所より，須恵器片とともに近世の陶磁器片が出土した（Fig. 6）。Ｈ１層は土質としては弥生時代の自然河川の基盤層Ｈ２層と同質であり，調査当初は弥生時代の遺構面であると認識していた。しかし，これらの遺物から，Ｈ１層の高所に位置する部分では，近世以降に堆積した箇所があることが判明した。ただし，高所に位置する部分は大規模な撹乱を受けており，こうした状況が確認できる範囲は極めて狭小であるため，ここで紹介するに留める。３は須恵器杯・椀の底部である。底面はヘラケズリで切り離され，貼付けの輪高台を接着する。４は信楽焼の鬢盥，５は唐津焼の碗である。

そのほか，廃土中または工事立会時に検出した出土層位不明の遺物をここで報告する（Fig. 7）。６は弥生土器二重口縁壺である。全体的に著しく磨耗しており，特に口縁部は本来もっと厚かったものと考えられる。７は弥生土器高杯である。８・９は弥生土器甑である。10は須恵器杯蓋である。体部の屈曲が明瞭で，器形が深い。11は須恵器長脚高杯の脚部である。

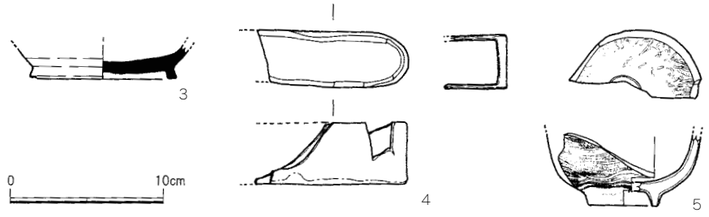


Fig. 6　Fig. 4 － Ｈ１層出土遺物（縮尺＝１／４）

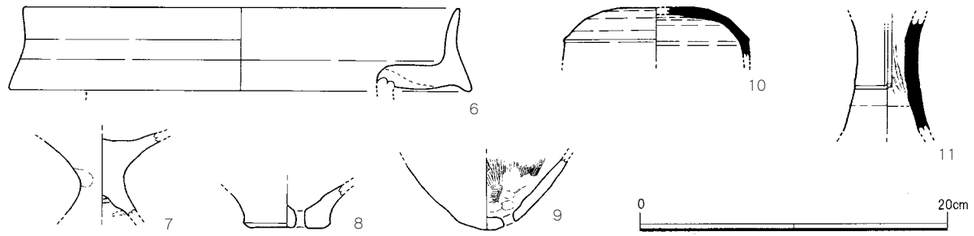


Fig.　7　出土層位不明遺物（縮尺＝１／４）

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　弥生時代

弥生時代に属する遺構は，調査区西側で検出した自然河川SR １のみである。詳細は第Ⅵ章にて後述するが，SR １は出土遺物から弥生時代後期後葉に一度埋没し，そののち古代にかけてさらに堆積作用が進み，平坦地を形成することが明らかとなった。本節ではこのうち，弥生時代の埋没による堆積層をSR １下層と呼称し，記述するものである。

ＳＲ１下層（Fig. ８）　調査区西端から中央にかけて，北西方向に流れていた自然河川跡を検出した。表面検出時にはクラックが多く認められたため，遺物を包含するFig. ５－Ｇ層が堆積したのち，一度地表に露出し，乾燥した時期があったものと考えられる。河川埋土の東端は調査区西端から東へ約 11 ～ 12 ｍの地点で検出した。西端は調査区外へ続くため，川幅などは不明である。ただし，調査区南西隅で黄褐色系のシルト層の上がりを部分的に検出した。溝の西端にあたる可能性が考えられたため，断割り調査を行ったところ，一度緩やかに立ち上がるが，西側へ向けて再度下降する状況を確認した。起伏が緩いため，自然地形の起伏によるものと考えられるが，水位の低い時にはこの地点で川が一度分岐していた可能性も考えられる。いずれにせよ，川の西側は調査区外に広がることを確認した。

ＳＲ１の堆積状況と遺物の含有状況の確認のため，遺物の検出および取り上げ終了後に東西方向に長く断割り調査を行った（Fig. ８）。断割り調査の結果，川底の標高は約 11.8 ｍを測ることが明らかになった。また，SR １埋没土の最下層には遺物を含まないことを確認したため，断割り部分で堆積状況を確認したのみで全掘は行っていない。

ＳＲ１下層出土遺物（Fig. ９～ 20）Fig. ５－Ｇ層およびＫ層上面から出土した遺物を報告する。自然河川の埋土中に廃棄された遺物であるため，堆積時のローリング作用に伴う混入があった可能性が高く，また連続して堆積作用の働く地形であるため，出土層位と出土遺物の時期とが厳密に対応しない状況であるが，現場での遺物検出状況を元に報告する。

遺物の取り上げにあたって，調査区西側の広い範囲で多量の遺物が出土しており，調査後の整理作業を効率的に遂行するため，現地では便宜的に基準点S1･S ２を基準に 2.5 ｍ角のグリッドを設定し，遺物の取り上げを行った（Fig. ８）。ただし，出土状況に平面的な断絶や極端な集中は認められず，別途図示した範囲で満遍なく出土した状況（Fig. ８）である。従ってこの区割はあくまでも整理を見越した便宜的な区分である。土器の出土状況は，土器群が一連のものであると判断できる状況であったため，図版の作成に際しては取り上げのグリッドに関わり無く，器種ごとに並べている。各個体の出土グリッドは文末の遺物一覧表（Tab. ５）にまとめた。なお，遺物の総量としてはおよそコンテナボックス（504mm × 304mm × 168mm）100 箱近くの土器片が出土している。

土師器・須恵器　12 は土師器土釜の口縁部である。13 ～ 17 は須恵器杯身である。口縁端部が残存するのは 13 のみである。やや長めの口縁部が内側に直立し，底部が深い。口縁端部に段をもたず，端面は丸く収める。口径は 12.4cm を測る。15 は口縁部の内湾具合が強い。13 ～ 16 は体部外面のケズリが体部下半１/ ４程度の範囲におよび，17 では１/ ２程度である。これらの型式学的特徴から，陶邑編年の TK10 ～ TK43 型式に相当するものと考えられる。18・19 は須恵器杯・椀の底部である。底部切り離しはヘラ切りによってなされ，18 については貼り付け高台の接合痕が観察できる。20 は須恵器壺・鉢の底部である。断面で粘土接合痕が観察できる。21 は須恵器壺の肩部である。やや大型の壺で，丸みをもちに外に広がる。12 ～ 21 については，混入の可能性が高い。

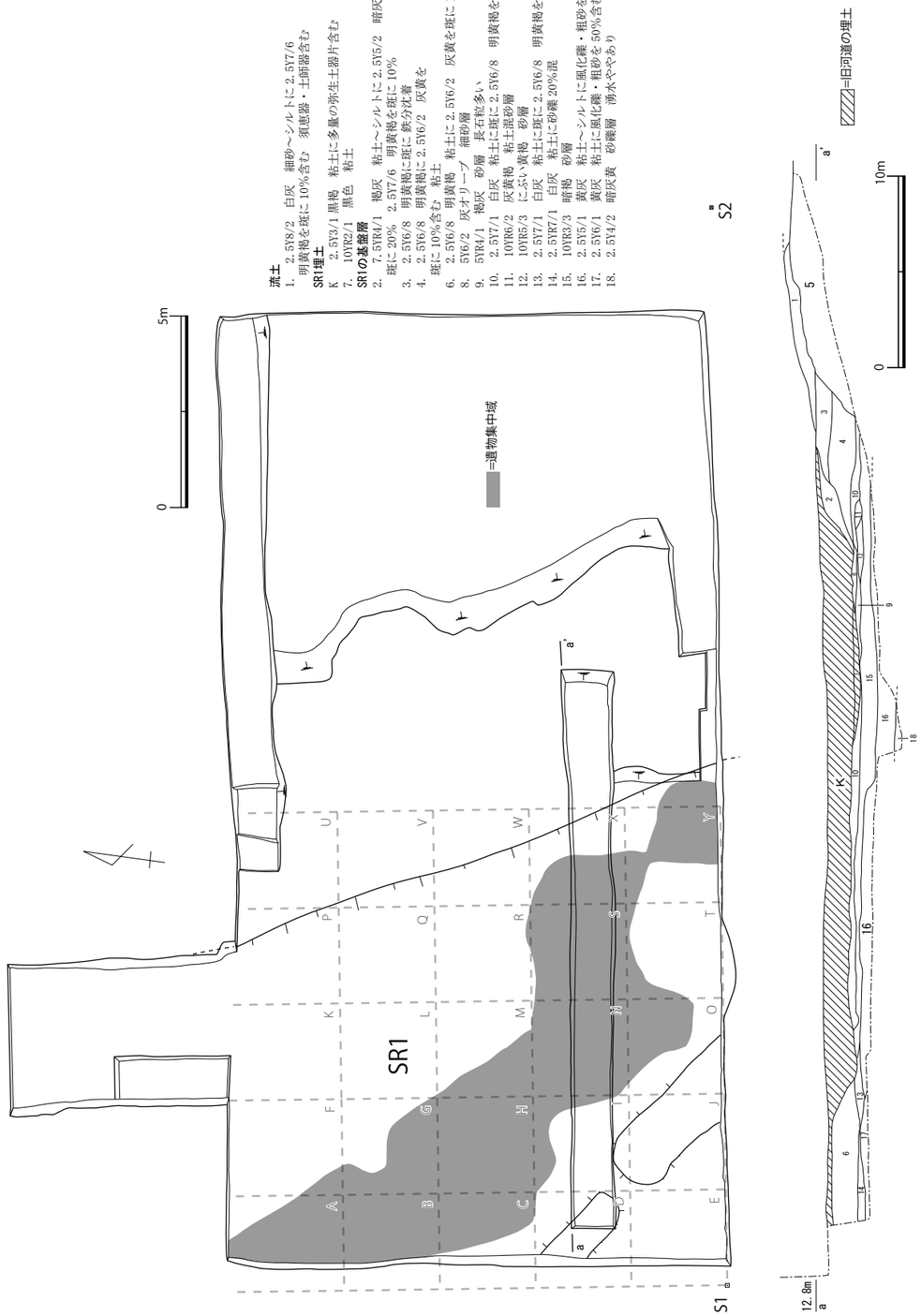


Fig.　８　SR １下層検出状況（平面図＝１/150，断面図＝ 1/300）

弥生土器 壺（22 ～ 78） 22 ～ 67 は壺の口縁部である。22 ～ 26 は口縁部が強く外反する二重口縁壺であり，23・24・26 には櫛描波状文がめぐる。焼成はいずれも不良で，胎土は灰白色を呈す，いわゆる白色系の土器である。32・33 は口縁部が「く」の字状を呈するいわゆる複合口縁壺である。焼成は良好で，胎土中に角閃石細粒を稠密に含む。28 は長頸壺である。頸部が外反しながら直立し，口縁部で屈曲して外へ広がる。頸部中央には，正面から見て左上がりの篦描直線文がめぐる。34 ～ 67 は広口壺の口縁部である。頸部が直線的に立ち上がるものと，やや外へ広がるものが認められる。39 はいわゆる白色系の土器である。器壁が厚く，口縁部の屈曲は明瞭でなく，口縁端部が上下に肥厚する。頸部の外面にはヘラミガキが認められる。68 ～ 73 は広口壺の頸部～体部である。70 は粘土紐の接合を強固にするためのハケ調整が頸部の粘土接合面に認められる（PL.19）。74 ～ 78 は壺の体部である。体部最大径は概ね体部中央に位置する。内面のヘラケズリは体部中央までおよぶ。外面をヘラミガキで仕上げるもの（Fig.11 － 75）と，細いタテハケで仕上げるもの（Fig.11 － 77・78 など）が認められる。

弥生土器 甕（79 ～ 177） 79 ～ 100 はいわゆる白色系の土器であり，総じて焼成不良で残存状況も悪い。口縁部の形状をみると，体部から直立気味に弱く屈曲するもの（Fig11 － 79・86 など）と比較的薄く，「く」の字状を呈して強く外反するもの（Fig.11 － 80・81 など）がある。97 は口縁端部を強く摘み出し，凹面を形成している。調整の判明しているものについて見ると，外面にタタキ調整が残るものが比較的多い。また，ハケ調整により仕上げるものも認められる。101 ～ 173 は甕の口縁部である。器壁は全体的に薄く，口縁部と体部の屈曲は明瞭である。口縁端部は肥厚せず，四角く収める。口縁部と頸部の境に頸部上の直立部分を持つ個体（Fig.12 － 113・116・126・130）が認められる。内面調整は上半に指頭圧痕が明瞭で，下半にはヘラケズリが及ぶ。174 ～ 176 は甕体部である。174 は壺体部の可能性も考えられる。176 は体部最大径の位置に焼成後穿孔が 1 孔認められる。177 は甕底部である。底径は 6.2cm を測り，底部と体部の屈曲は明瞭である。外面にはタテヘラミガキが認められ，内面はヘラケズリが及ぶ。

弥生土器 底部（178 ～ 299）178 ～ 261・286 ～ 290・293 ～ 299 はいわゆる白色系土器の底部である。総じて焼成不良であり，調整等が摩滅により不明な個体が多い。底部と体部の屈曲はおおむね明瞭である。体部外面にはタタキ調整が認められる個体が多く，底面にもタタキ調整の痕跡が残る個体が認められる。また，数量は少ないが底面にヘラミガキが認められる個体（Fig.14 － 182）も存在する。191・210 には底面に葉脈の圧痕が残っている（PL.19）。185 の底面には植物の種子の圧痕状の痕跡が認められる（PL.19）。内面の調整が良好に残る個体は少ないが，板状工具の圧痕が残る個体がある（Fig.13 － 160・Fig.15 － 255）。262 ～ 285 はいわゆる香東川下流域産の土器である。器壁が薄く，角閃石の細粒を含むが，肉眼観察による限り，角閃石の含有量は少ない。外面にはヘラミガキ，内面下半にはヘラケズリを施す個体が多数を占める。また，底面にもヘラミガキを施す資料が多く見受けられる（Fig.16 － 270・273・279 ～ 282・292）。292 は底部と体部の屈曲が明瞭ではなく，丸底に近い形状を呈するが，ヘラミガキの調整の方向によって明確に底部を区別している。286 ～ 290，293 ～ 299 は甑である。基本は底部中央付近に 1 孔だが，299 は近接する位置に 2 孔を穿つ。

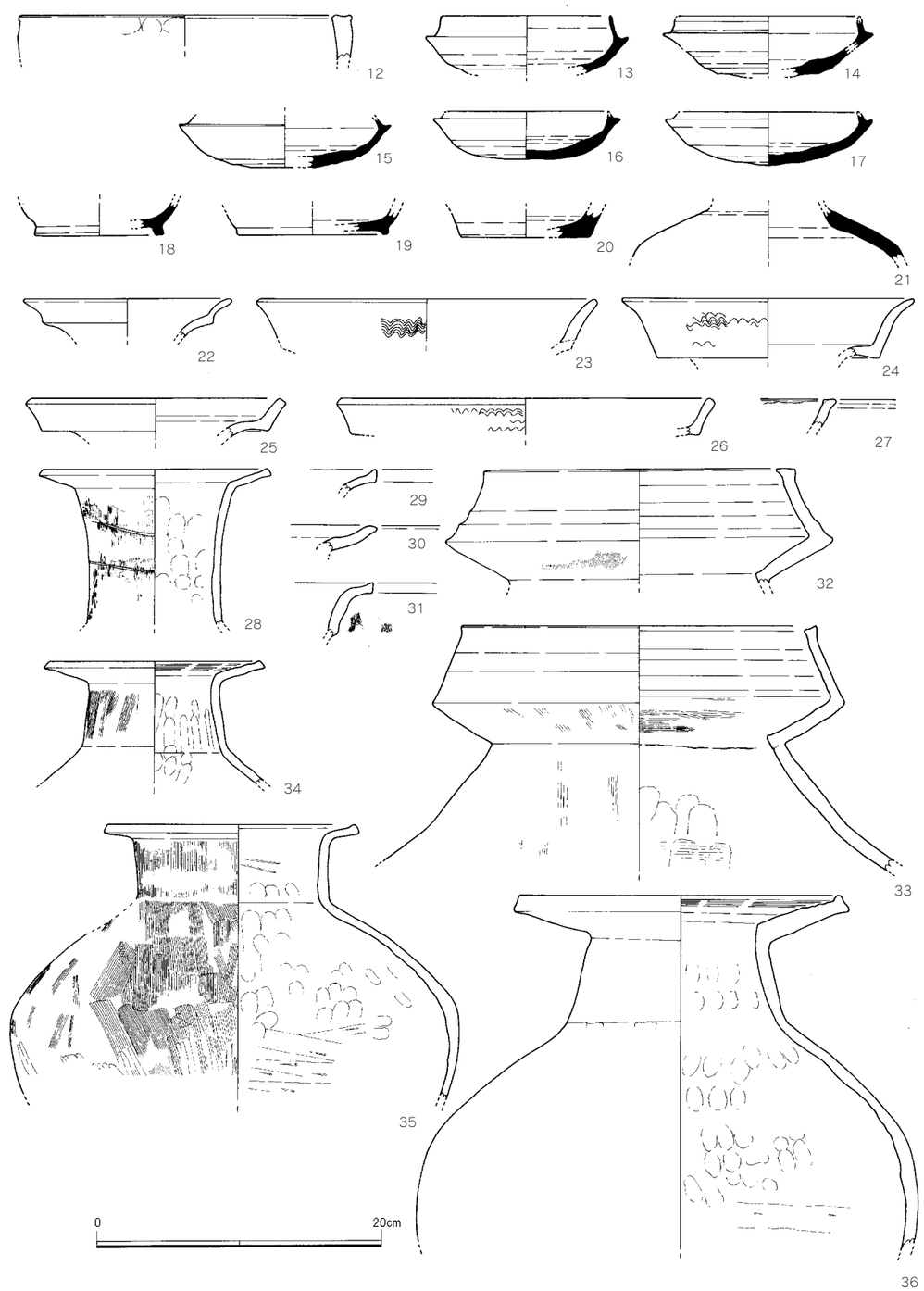


Fig. 9 SR 1 下層出土遺物①（縮尺＝ 1 /4）

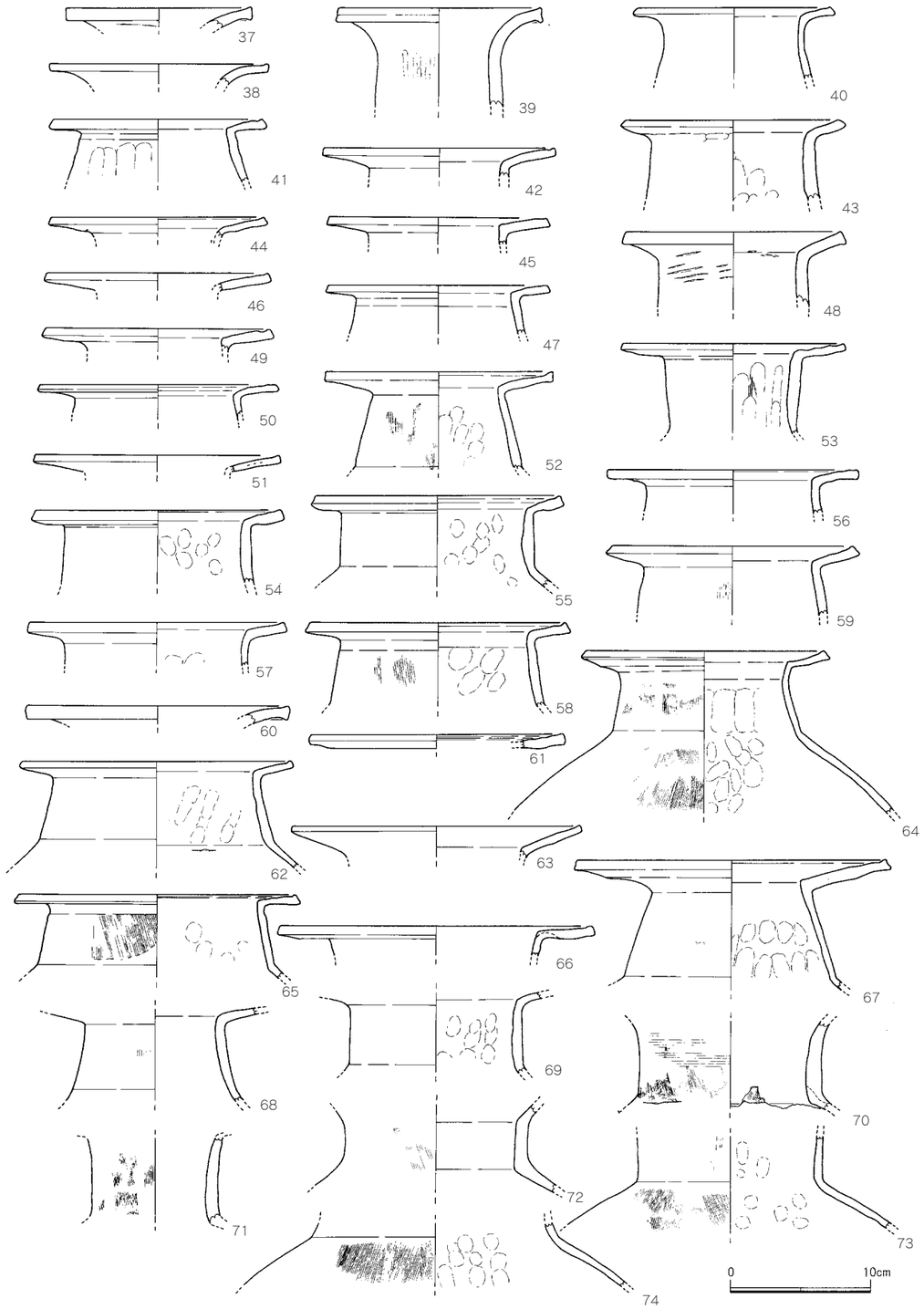


Fig. 10　SR 1 下層出土遺物②（縮尺＝1／4）

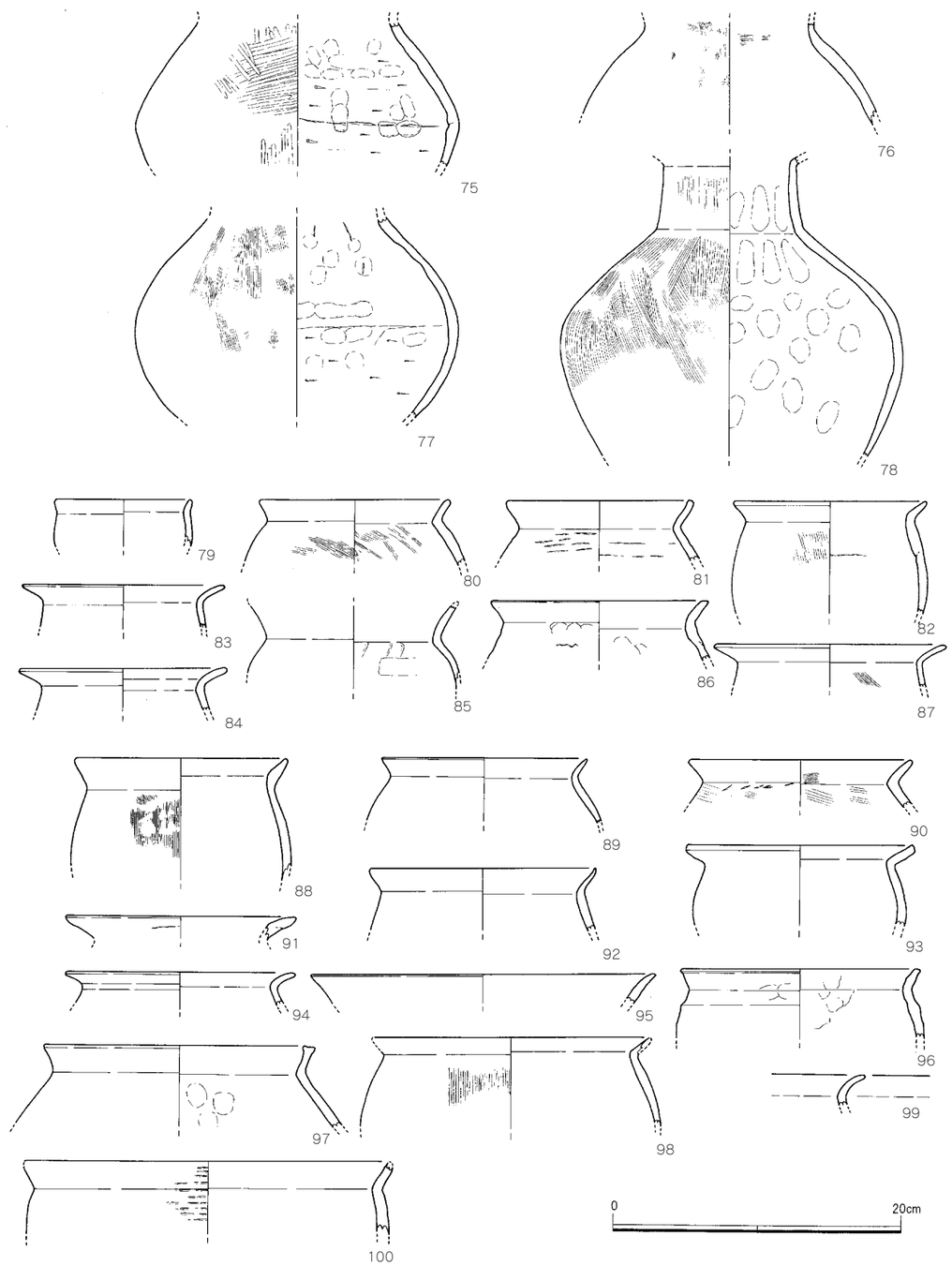


Fig. 11　SR 1 下層出土遺物③（縮尺＝1／4）

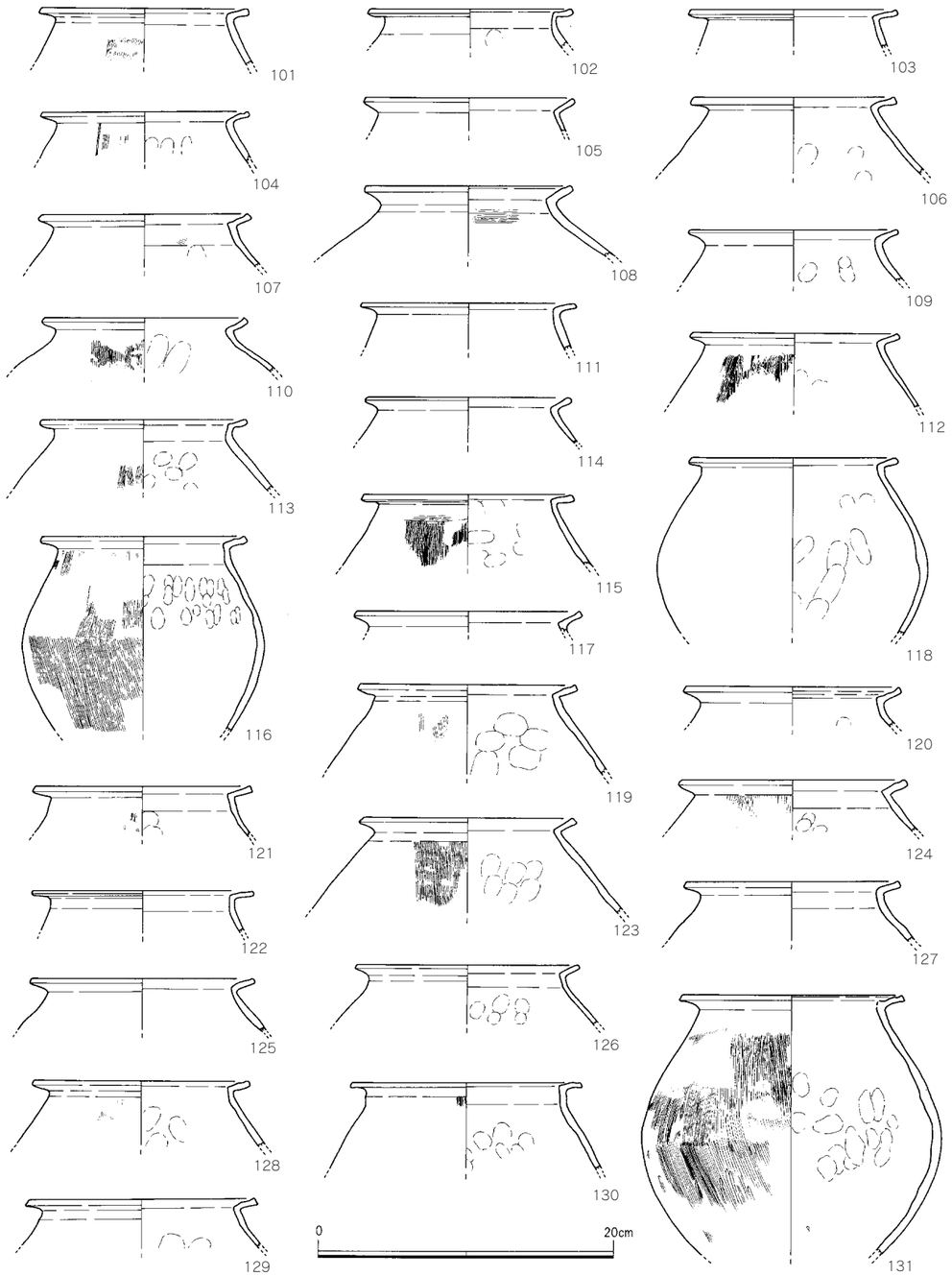


Fig.12　SR 1下層出土遺物④（縮尺＝1／4）

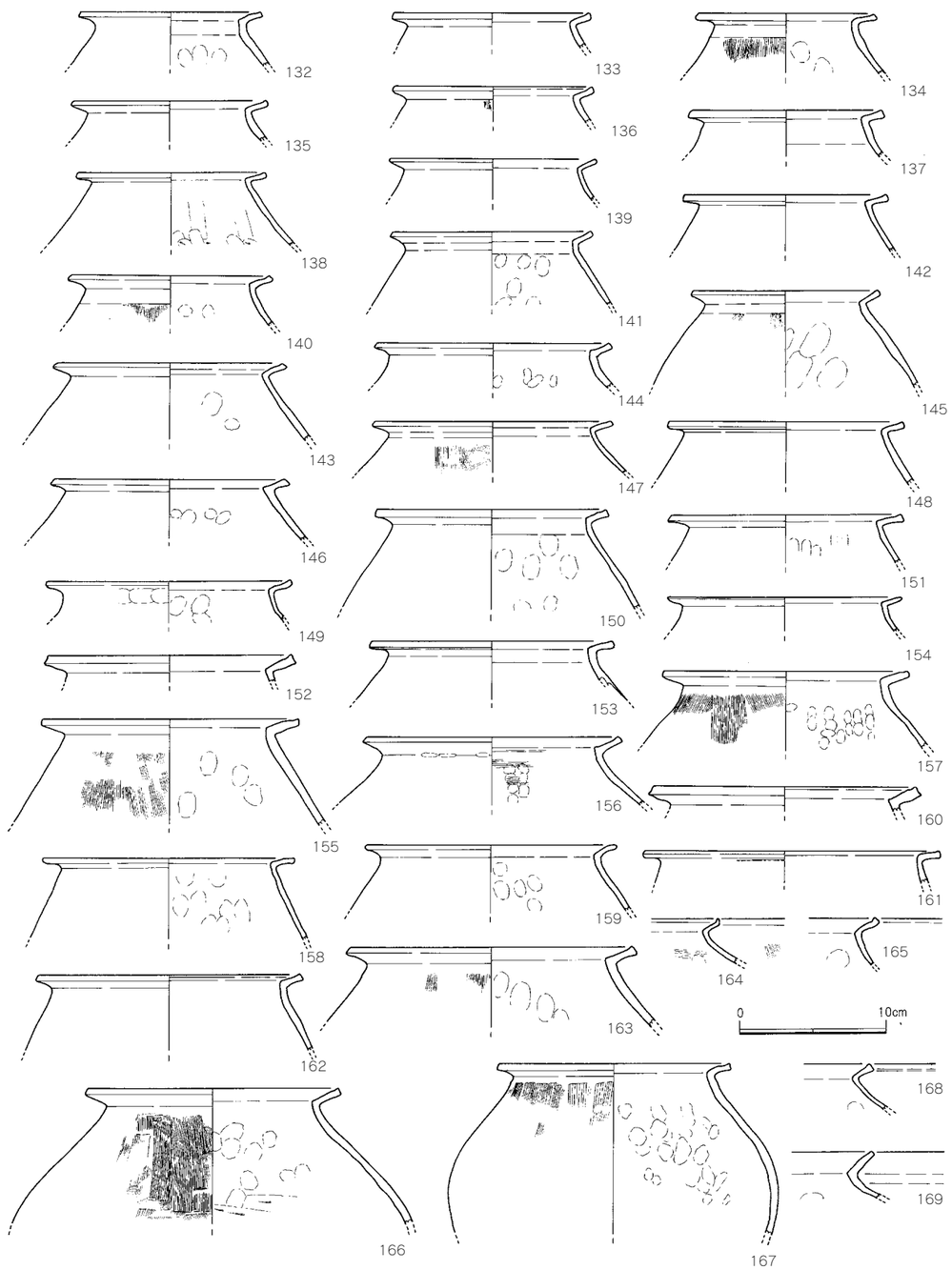


Fig. 13　SR 1下層出土遺物⑤（縮尺＝1／4）

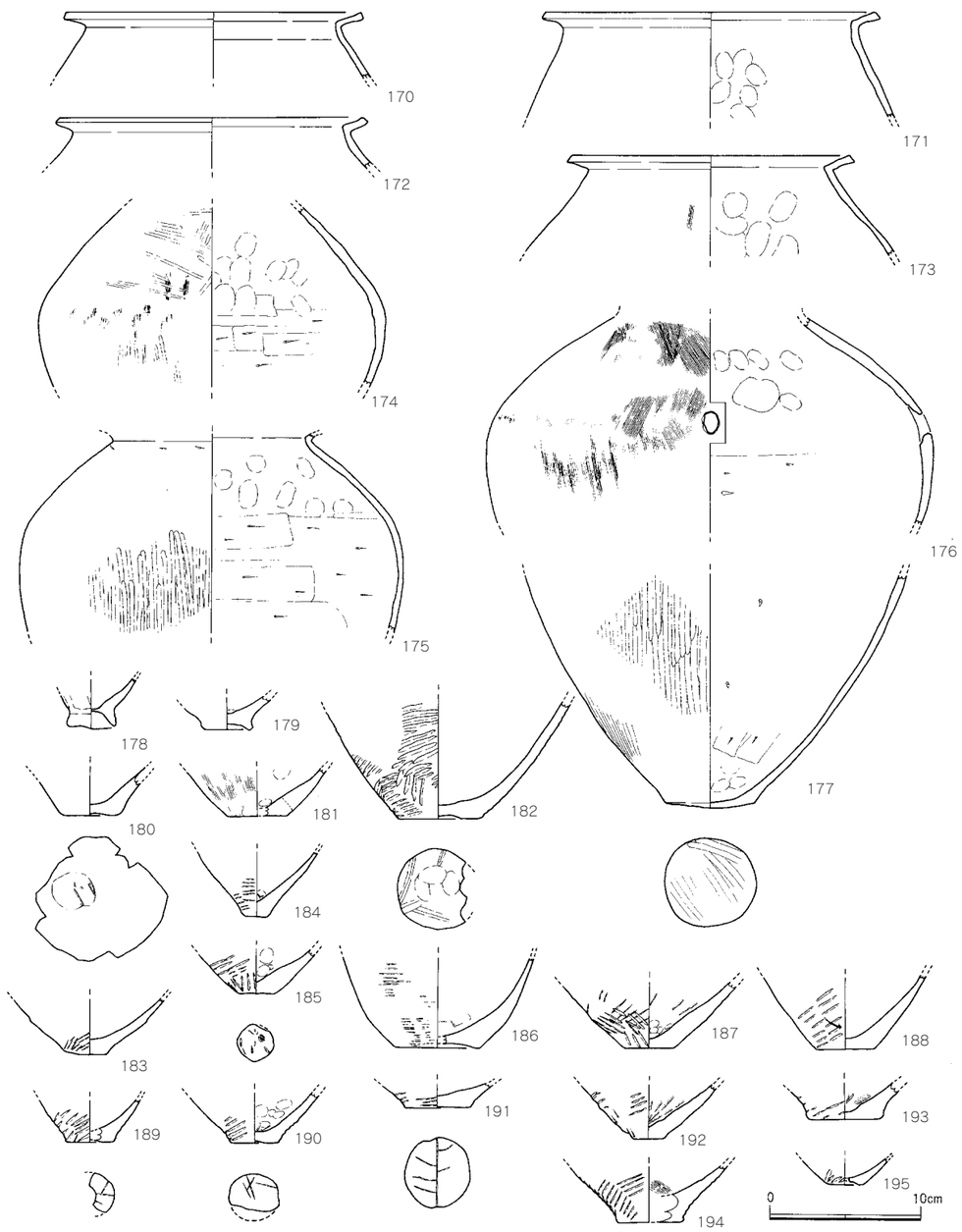


Fig. 14　SR 1下層出土遺物⑥（縮尺＝1／4）

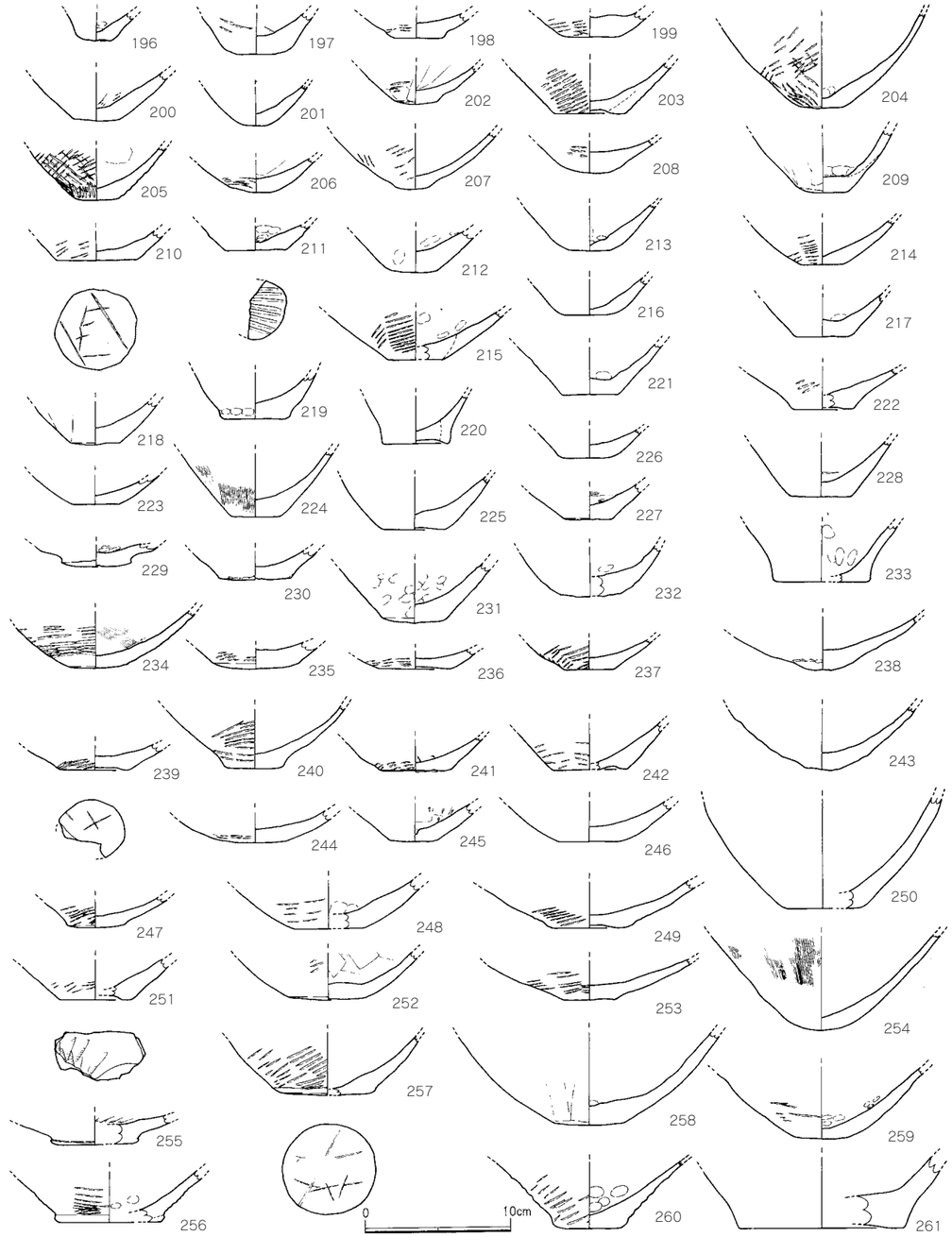


Fig.15　SR 1下層出土遺物⑦（縮尺＝1／4）

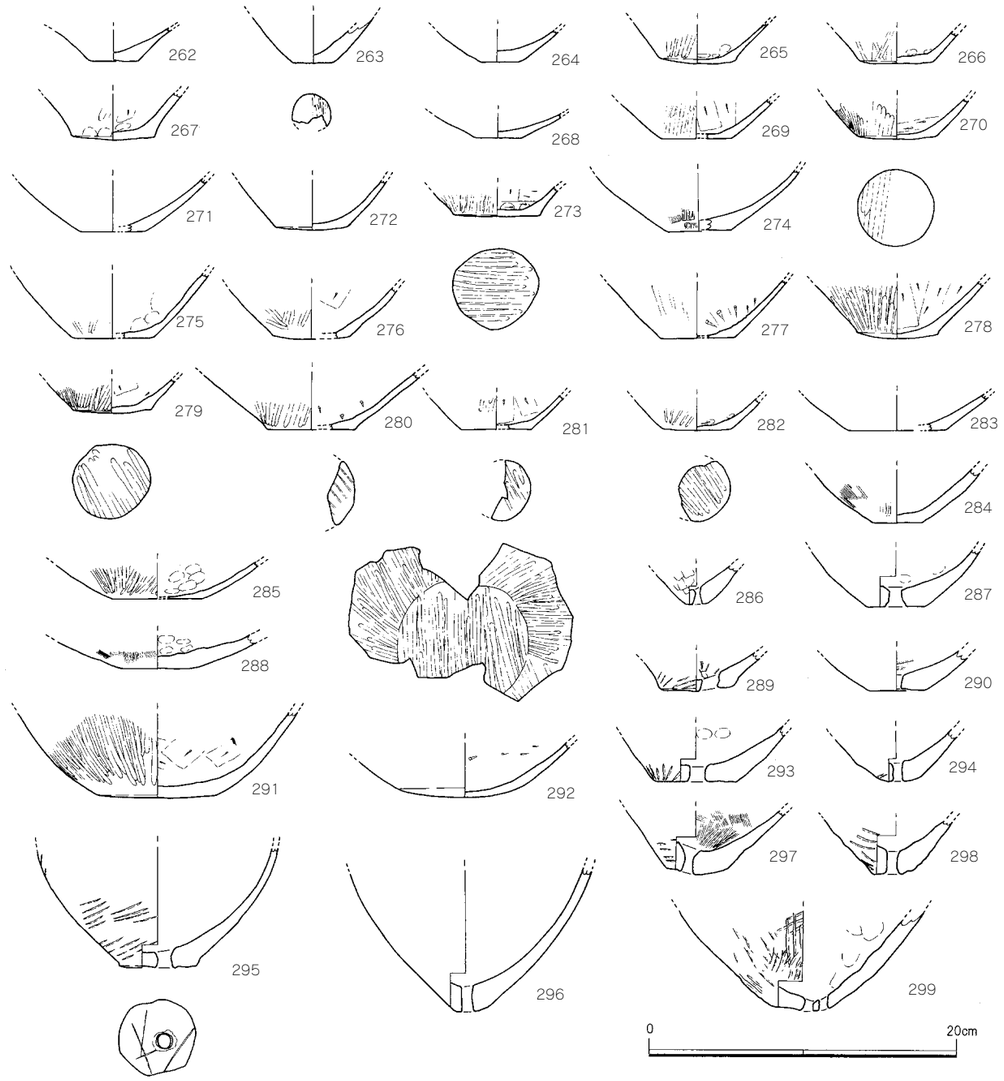


Fig.16　SR 1下層出土遺物⑧（縮尺＝1／4）

弥生土器 高杯（300 ～ 334）　315 ～ 318・321 ～ 325，329 はいわゆる白色系土器である。総じて焼成不良で全体的に磨耗しており，調整等不明な資料が多い。300 ～ 312・314 は口縁部の残存する資料である。300 は小型の高杯である。脚部は「ハ」の字状に緩やかに屈曲して開き，端部は肥厚せずに収まる。また，上下２段の焼成前穿孔による円孔が認められる。やや強く湾曲しながら外に向かって開き，端部は肥厚せず丸く収める形状を呈す。310・314 のように口径がcmを超える大型の資料も認められる。311 ～ 313 は杯部内面に分割ヘラミガキが認められ，311 については外面にも同様の調整が認められる。

313・319・320 は杯部の残存する資料である。315 ～ 318，321 ～ 334 は脚部の資料である。杯部との接合部付近から「ハ」の字状に開くものと，器厚の厚い直立する筒状の脚部から強く

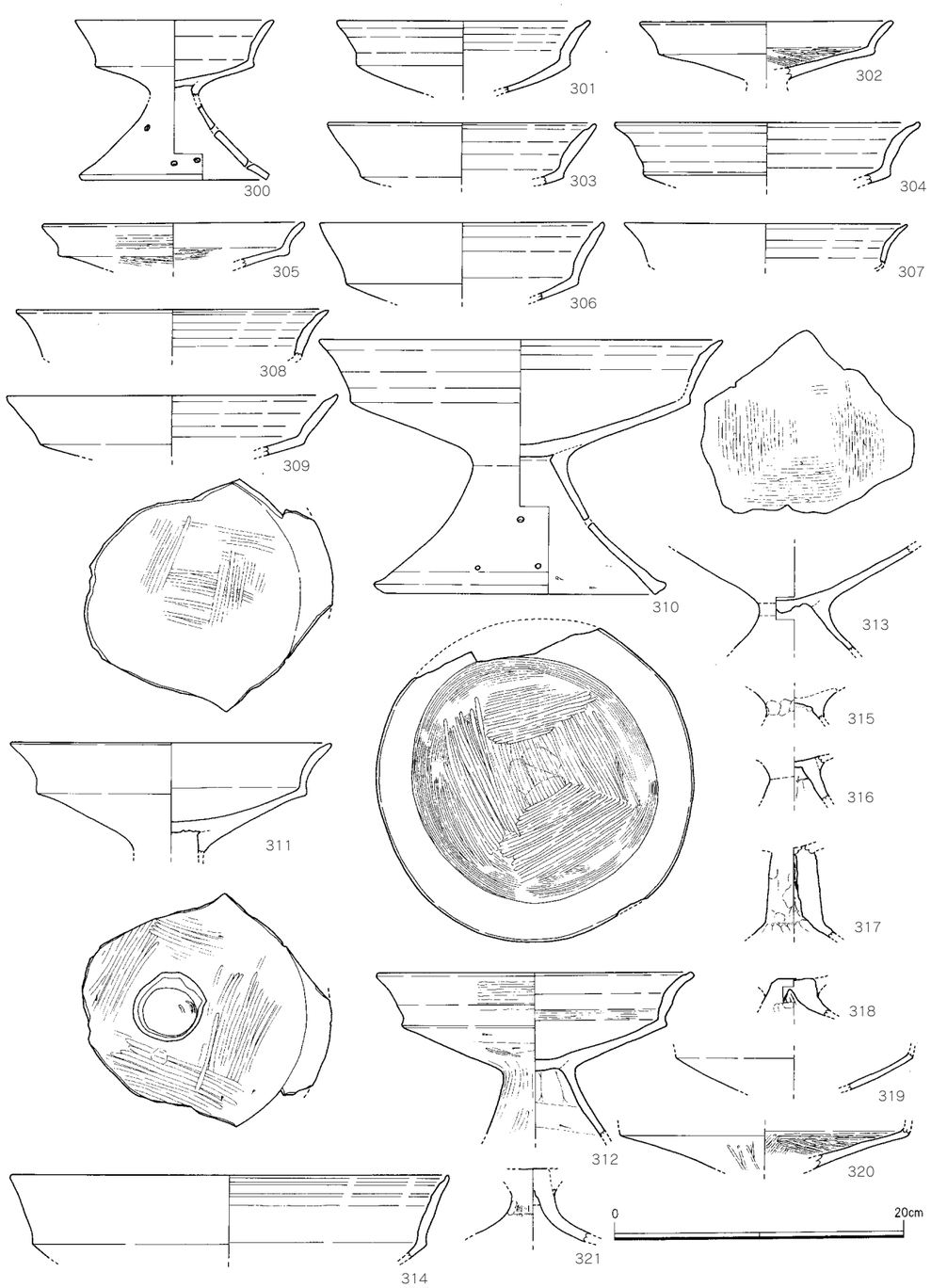


Fig.17　SR 1下層出土遺物⑨（縮尺＝1／4）

屈曲して外へ広がるものが認められる。315 は接合部付近が粘土紐の単位で剥離したものと考えられる。321・324・327 は円筒状の脚部の接合部側の一端を閉塞した形状を呈す。324 の接合痕を見ると，脚部に杯部を作り足すかたちで成形した可能性が考えられる。328 は器種不明である。焼成不良で色調は灰白色～橙色を呈する，いわゆる白色系の土器である。断面三角形の突帯を貼り付け，突帯と体部の境付近に竹管文を巡らせる。また突帯の上方には３本の凹線をめぐらせている。装飾高杯の脚部片の可能性が考えられるが，突帯付近に傾斜の変換点が認められずないため，壺の体部片の可能性も考えられる。329 は脚部中央に１孔１対４箇所の円孔が巡る。内外面ともにタテハケの痕跡が認められ，脚端部は丸く収める。331 ～ 324 は脚端部がやや肥厚し，断面三角形に近い形状を呈する。内面はヘラケズリが施され，器壁が薄くなっている。

弥生土器 鉢（335 ～ 336） 335 は片口鉢の口縁部である。口縁部と体部の境は明瞭に屈曲し，口縁端部は丸く収める。336 は小型の鉢である。口径 10.4cm を測り，口縁部は直立気味に立ち上がる。337 は器種不明である。器高が 1.9cm と低い。底面付近は粘土接合痕で剥離していた可能性が高く，本来は下へつながる器形であった可能性が考えられる。

弥生土器 蓋（338・339） 338 は蓋の頂部である。頂部は突起状に丸く収まり，端部は欠損している。339 も蓋の頂部で，頂部の形状は突起状を呈す。白色系の土器であり，色調は灰白色を呈す。頂部内面は指頭圧により押し窪められており，爪の圧痕が観察できる。体部内面は不定方向のハケによって調整されている。

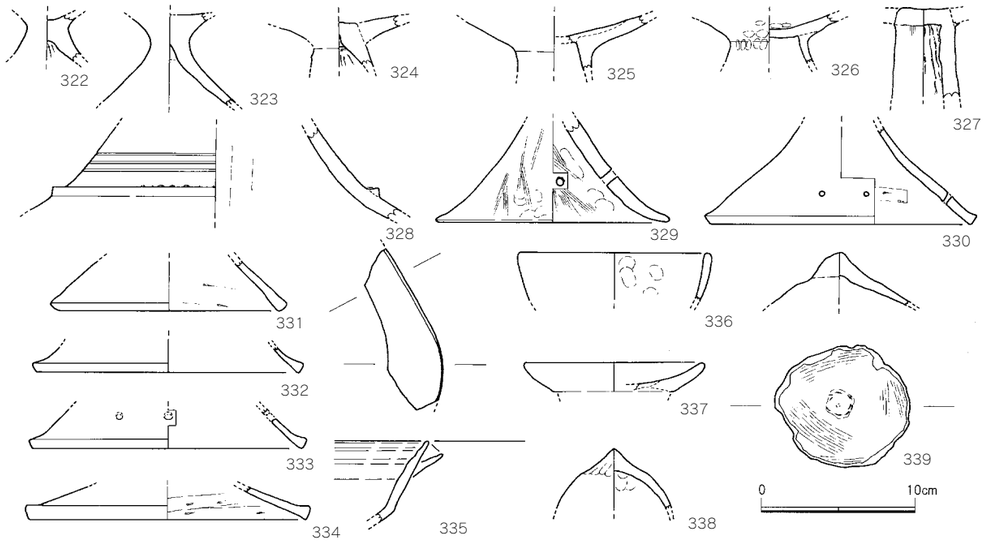


Fig.18　SR １下層出土遺物⑩（縮尺＝１／４）

小結　ＳＲ１下層から出土した多量の土器のうち，圧倒的に主体を占めるのは弥生土器である。弥生土器の器種組成を見ると，壺では広口壺・複合口縁壺・二重口縁壺がみられ，甕・高杯・鉢では小型～大型に法量分化していることがわかる。口縁部形状などの型式学的な特徴からは，これらの遺物群に時期差は小さいものと考えられる。自然化学分析の結果では，Fig. ５－Ｇ層は比較的短期間で堆積した可能性と，乾燥と湿潤を繰り返す状態であった可能性が指摘されている。器形では広口壺の口縁部は肥厚しない点，底部では平底のものが丸底化しつつある点などが挙げられ，これらの特徴からこの土器群は下川津Ⅰ式新相 - Ⅱ式（大久保 1990），Ⅴ - ４様式～Ⅴ - ５様式（真鍋 2000）におおむね比定できるであろう。

香東川下流域産土器と白色系の土器の両者が認められるが，同器種でもそれぞれ器形が大きく異なることが明らかである。白色系土器は総じて摩滅が著しく，すべての器種で比較検討できないが，甕では口縁部形状，広口壺では口縁部の屈曲などに明瞭な差異が認められるほか，外面調整では白色系土器がタタキを頻用するのに対し，香東川下流域産土器ではミガキと細いハケを多用するといった製作技法上の違いも見て取れる。筆者の力量不足から，ここで考察することはできないが，堆積状況から，これらの資料が比較的一括性が高いことは先述のとおりである。高松平野における香東川下流域産土器と白色系土器の並行関係を検討する素材となりうる資料であろう。

〈主要参考文献〉
大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前期の土器について」『下川津遺跡』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　香川県教育委員会ほか
大久保徹也 2003「高松平野香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』学生社
乗松真也 2006「高松平野における弥生時代後期の土器編年」『調査研究報告』第２号香川県歴史博物館
真鍋昌宏 2000「讃岐地域」『弥生土器の様式と編年』四国編　木耳社

ＳＲ１下層検出中出土土器　調査時の掘削の順序として，古代の遺構面である第１遺構面の調査完了後に下層の遺構検出を目指して掘削を行った。試掘調査によって，第１遺構面の下層に弥生土器を多量に含む自然河川があることが判明していたため，弥生土器検出面までは，重機を用いて掘り下げを行った。重機による掘り下げおよび重機掘削後の清掃時に出土した遺物は，帰属する層位を厳密に比定できないと判断したため，ＳＲ１下層検出中出土土器としてここで報告する。

須恵器（340 ～ 343） 340・341 は須恵器杯身である。340 の口縁部は内向せず直立し，受部は水平に広がる。口縁端部は丸く収める。341 は体部下半１／４程度の範囲にヘラケズリが及ぶ。342 は須恵器杯口縁部である。直立する深い口縁部をもち，口径は 17.0cm を測る。343 は須恵器高杯の接合部である。脚部には長方形の透孔が３方向に配される。穿孔時の工具痕から，杯部と脚部の接合後に穿孔がなされたことが明らかである。

弥生土器 壺（344・345） 344・345 は広口壺の口縁部である。頸部から強く屈曲し，口縁部が水平方向に伸びる。

弥生土器 甕（346 ～ 355） 346 ～ 354 は甕の口縁部である。体部から口縁部にかけて「く」の字状に強く屈曲し，短い口縁部に続く。端部は肥厚せず，四角く収める。355 はいわゆる白色系の土器である。外面は口縁部付近までタタキの痕跡が残る。口縁部と体部の境の屈曲は弱く，弱く外反しながら広がり，端部は丸く収める。

弥生土器 底部（356 ～ 370） 356・357 は内面にケズリが丹念に施され，器壁が非常に薄い。358 ～ 369 はいわゆる白色系の土器であり，器壁が厚い。358 は外面にタタキの痕跡が残り，底面には粗いハケの痕跡が残る。367・368 は甑である。底面中央に焼成前に円孔が１孔穿たれている。370 は角閃石を多量に含む弥生土器壺・甕の底部である。底部と体部の屈曲は不明瞭で，丸底に近い形状を呈すが，ヘラミガキの方向によって底部と体部が明瞭に分かたれている。

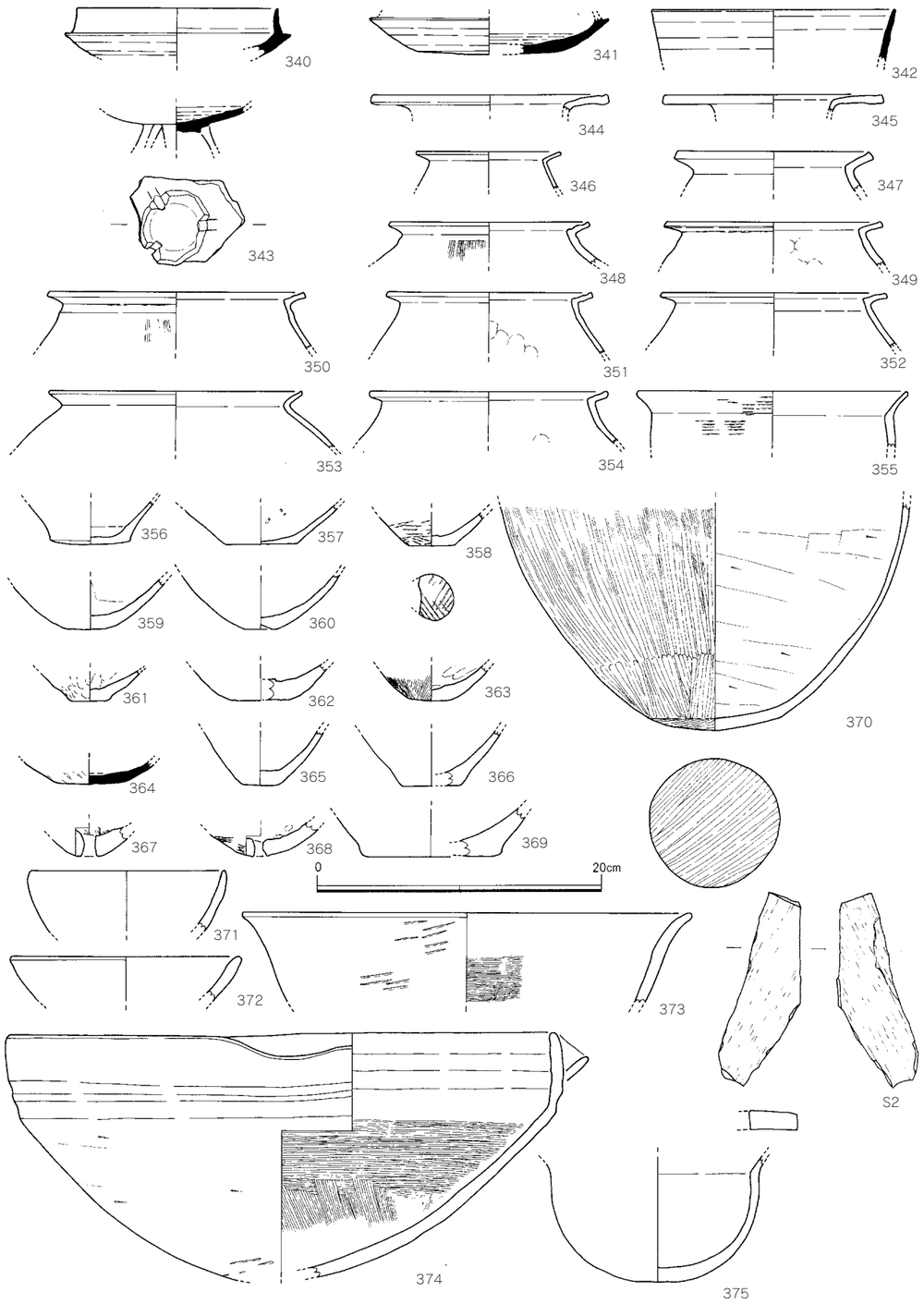


Fig.19　ＳＲ１下層検出中出土土器（縮尺＝土器１／４，石器１／４）

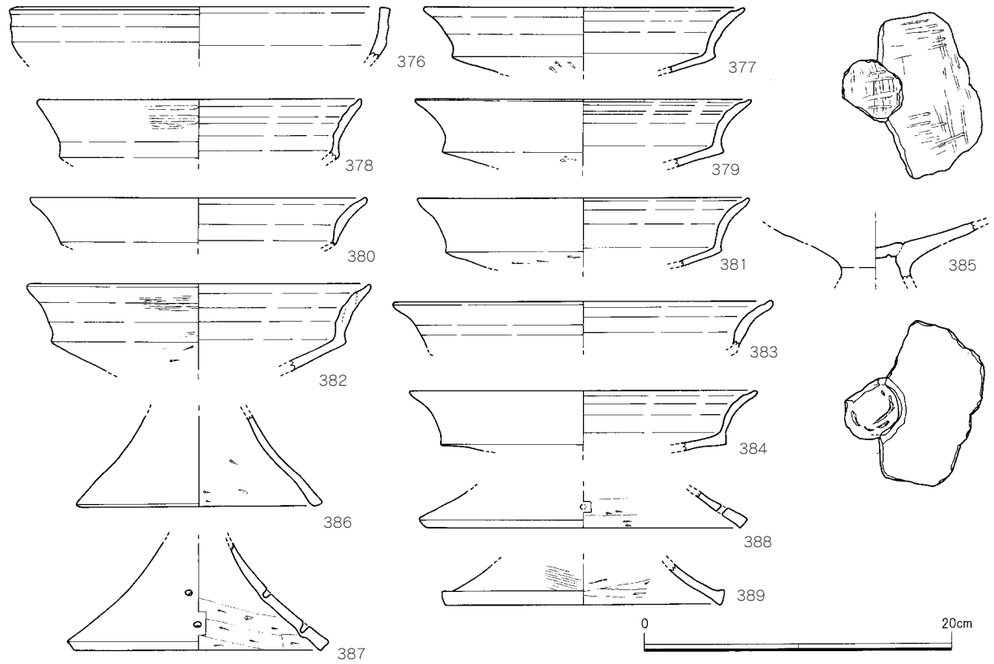


Fig.20　ＳＲ１下層検出中出土土器（縮尺＝１／４）

弥生土器 鉢（371 ～ 376）371･372 は小型の鉢である。口縁部は緩やかに内反して丸く収まる。373・374 は大型の鉢であり，373 はいわゆる白色系の土器である。外面にはタタキの痕跡が残り，内面はヨコハケにより調整される。口縁部はゆるやかに外反し，丸く収める。374 は片口鉢である。接合作業により，ほぼ完形に復元することができた。口縁部は基本的に直立し丸く収める。ユビオサエによって片口部が作り出される。体部から底部の外面はヘラケズリが施されている。底部付近にはヘラケズリ前のタタキ痕が一部残っている。内面下半はタテハケ，上半にはヨコハケが施される。375 は白色系土器の小型鉢である。体部は球体に近いプロポーションで，口縁部にかけてやや屈曲する。

弥生土器 高杯（377 ～ 389）　377 ～ 384 は高杯の口縁部である。総じて口縁部が強く外反し，口縁端部は丸く収める。378・382 は口縁部外面にヨコヘラミガキが認められる。385 は杯部と脚部の接合部である。円盤充填の痕跡が良好に観察できる。杯部内面は分割ヘラミガキが施される。杯部底面にはヘラ状工具による線刻が円弧を描いて刻まれている。脚部を接合する際の目印の役割を果たしたものと考えられる。386 ～ 389 は脚部である。387・388 は脚部中央に円孔が穿たれる。387 は孔が外面から穿たれるが，未貫通である。

石器　Ｓ２は用途不明の板石である。表裏面ともに縦方向の擦痕が見られるため，砥石の可能性も考えられるが，砥面と判断するには表面があまり平滑でなく，断定できない。

第２節　　古代

第１遺構面中から古代に属する遺物がまとまって出土しており，遺構面の形成時期が古代以降であることが明らかである。この遺構面上で検出した遺構からはほとんど遺物が出土せず，厳密な時期比定は困難なものばかりであるが，埋土の類似性や同一遺構面からの堀り込みなどを重視して，ここでまとめて報告することとする（Fig.21）。

調査区西側で遺構面となっているのは，暗褐色シルトを主体とした層である（Fig. ５―Ｆ層）。この層は弥生時代後期後葉に埋没した自然河川ＳＲ１の上層であり，古代に再度洪水等により埋没して平坦地を形成したものと考えられる。自然河川の埋没後平坦地となった場所が生活域として利用されたことが判明した。この遺構面中からは多量の遺物が出土しており，遺構面の形成時期を検討する素材となりうるため，ＳＲ１上層（第１遺構面）出土遺物としてここで報告する（Fig.21 ～ 22）。

弥生土器（390 ～ 393）　390 ～ 392 は甕の口縁部である。390・391 は体部から強く「く」の字状に屈曲して短い口縁部に続く資料である。392 はいわゆる白色系の土器である。直立気味の体部から外方へ緩やかに屈曲し，短い口縁部が再度直立する。393 は高杯の接合部である。

土師器（394）　394 は土師器椀の口縁部である。丸く肥厚する口縁部形状を呈す。

緑釉陶器（395）　緑釉陶器椀または皿の底部である（PL15）。遺構等には伴わずに出土した。削出しの円盤状高台で，内面～底面および高台側面まで釉薬が付着し，釉調は淡緑色を呈す。素地はやや軟質で，色調は灰白色を呈す。

須恵器（396 ～ 423・425）　396 ～ 399 は蓋である。396 は口縁部内側にかえりをもつ小型の蓋で，口径 8.8cm を測る。400 は杯身の口縁部である。短い口縁部が内傾せず直立気味に伸びる。401 は皿の口縁部である。口径 15.2cm を測る。402 ～ 404 は杯口縁部である。405 は杯・皿底部である。底部切り離しはヘラ切によりなされる。406・407 は杯・高杯口縁部である。口縁部は内湾し，丸く収める。408・409 は無高台の杯・皿底部である。底部切り離しはヘラ切である。410 ～ 415 は輪高台の底部である。416 ～ 419 は高杯の脚部である。420 は壺の口縁部である。421 は壺・甕底部である。422・423 は大型の鉢口縁部である。ともに櫛描波状文を巡らせる。423 は口縁端部を外側に折り返して成形している。425 は甕体部と器種不明個体が融着する個体である。内外面ともに自然釉が付着する。

その他（424・426・427・S1）　424 は瓦質の焙烙である。426 は移動式竈片である。427 は土錘である。長さ 5.9cm，最大幅 2.3cm を測り，長方形に近いプロポーションである。S3 は器種不明のサヌカイト片である。片面は細かな調整が集中し，刃部を形成している可能性がある。

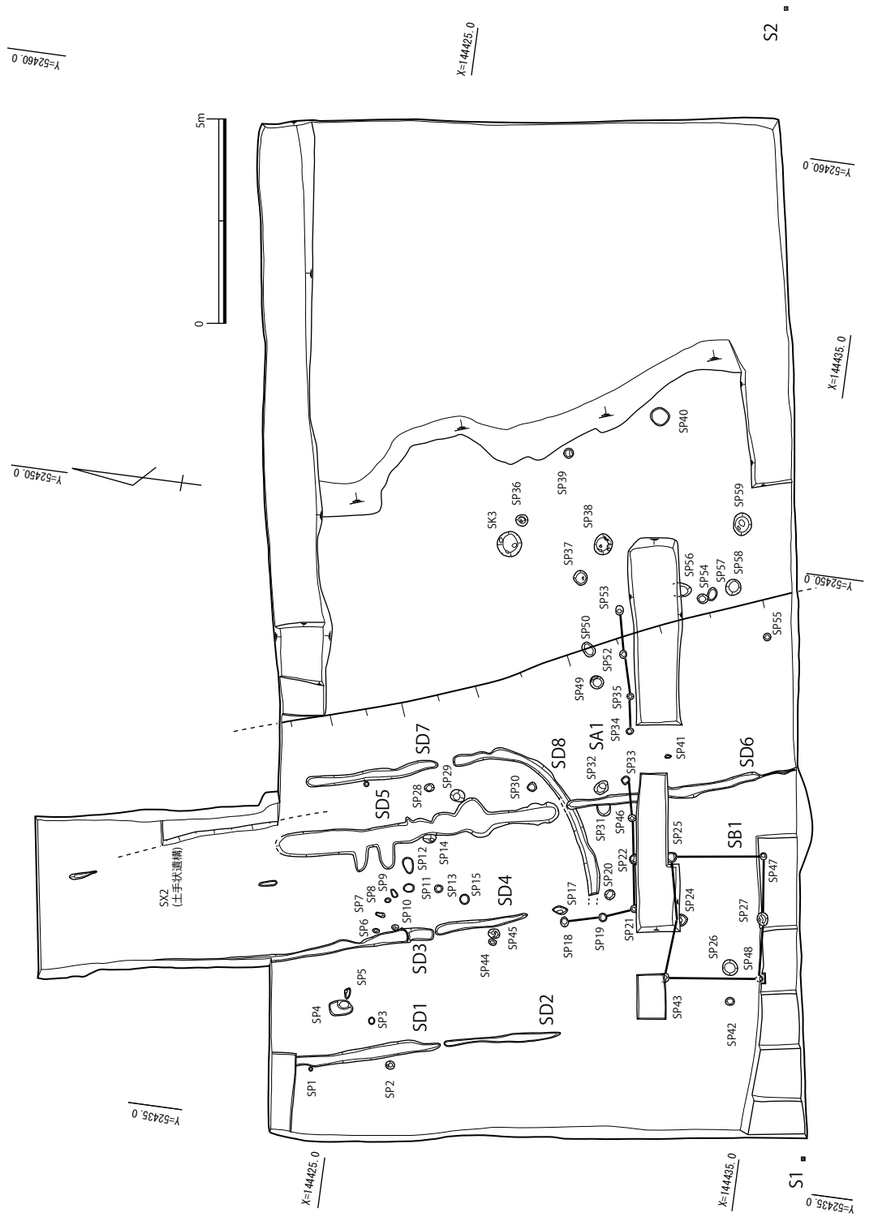


Fig.21　第１遺構面および遺構検出状況（縮尺＝１/150）

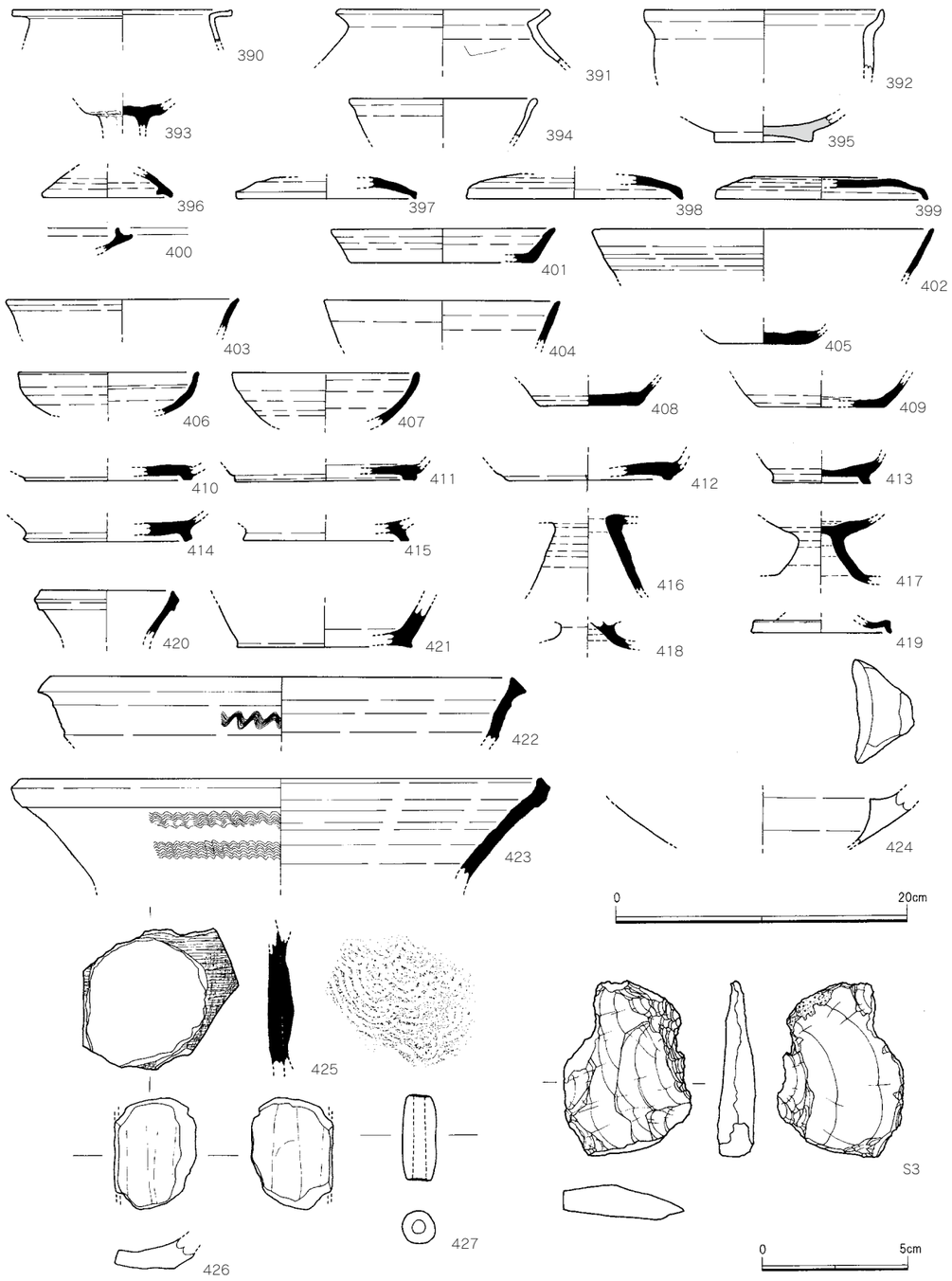


Fig.22　ＳＲ１上層（第１遺構面）出土遺物（縮尺＝土器１／４，石器１／２）

（１）柵列跡

ＳＡ１（Fig.23）　調査区西側から中央にかけて検出した柵列跡である。近接する溝群と主軸方向を揃え，南北方向に２間，東西方向に７間を検出した。東側では北に向かって直交する柱列は検出できなかった。柱穴の埋土は灰オリーブ色シルト～極細砂ないし暗オリーブ灰色極細砂～細砂と類似し，遺構深度も 0.2 ～ 0.3m 程度で共通する。柱穴間の距離は 0.8 ～ 1.25 m で，平均すると 1.03m である。調査時には SP32 と SP34 が平面形で連続し，SP33 と SP34 を境に東西で別の遺構である可能性も考えていた。しかし，SP32 － 34 間の距離が 0.65m と他に比べて短く，また SP32 の断面形が二段掘削で深さ 0.5m と他の柱穴の形状と大きく異なるため，SP32 － 34 が一連のものではなく，SP33 と SP34 が連続すると本報告では判断した。ただし，遺構埋土などは共通性が高く，一連のものであった可能性も否定はできない。

出土遺物については，図化していないが，ＳＰ 18 から角閃石を稠密に含む弥生土器壺の肩部を検出した。ＳＰ 21 からは土師質の土器細片を 10 点程度検出した。ＳＰ 22 からは図化不能であるが土師器杯の口縁部の可能性がある資料が出土した。ＳＰ 46 からは角閃石を稠密に含む土師質の土器片が出土した。ＳＰ 32 からは軟質に焼成された須恵器体部片と弥生土器のタタキ甕体部片が出土した。

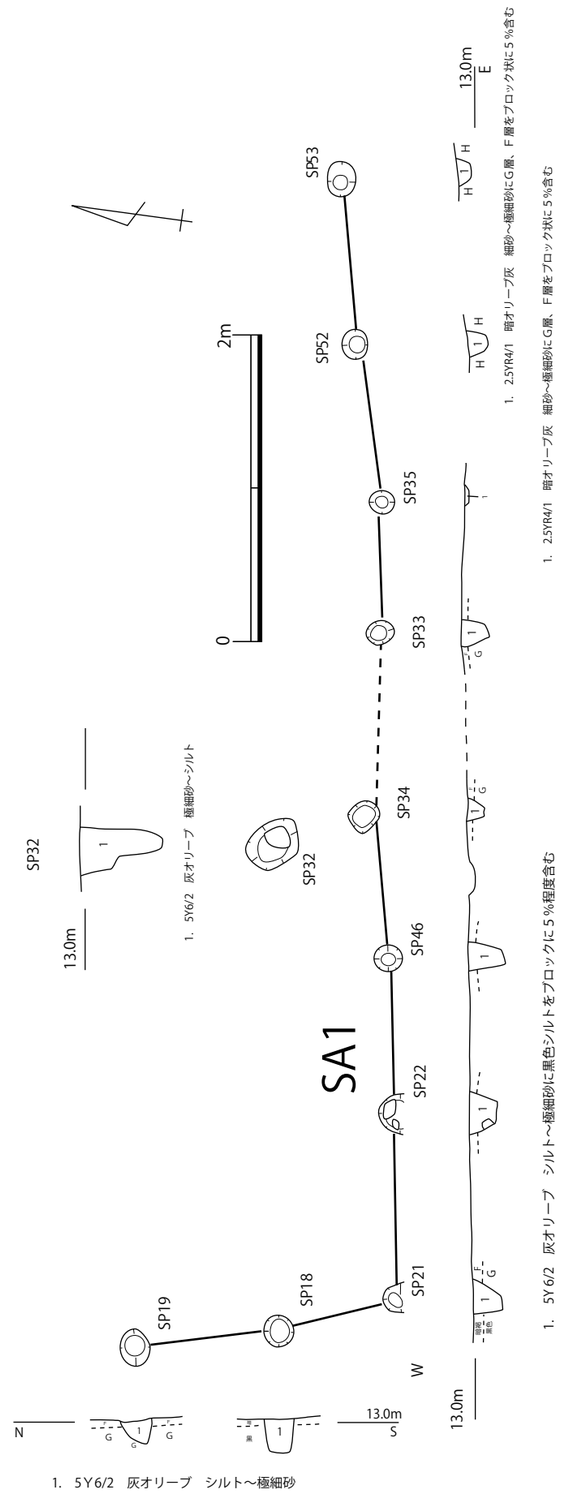


Fig.23　ＳＡ１平・断面図（縮尺＝１/50）

（２）掘立柱建物跡

ＳＢ１（Fig.24）　調査区南西隅で検出した掘立柱建物跡である。北西隅から順に反時計回りにＳＰ 43・48・27・47・25・24 から構成される。桁行は南北１間・東西２間である。北列の柱穴と南列の柱穴の間隔は約 2.3 mを測り，各列中の柱穴間の距離は平均して約 1.5 mである。北列の SP43・24・25 は試掘トレンチによって北半が削平され，残存した南半でも上部はかなり掘り削られている状況であった。遺構埋土はすべて灰オリーブ色系統のシルト～極細砂である。

出土遺物であるが，SP27 の埋土上面から須恵器甕の体部片（428）が出土したほか，ＳＰ 24・27 から土師質の土器細片が出土した。

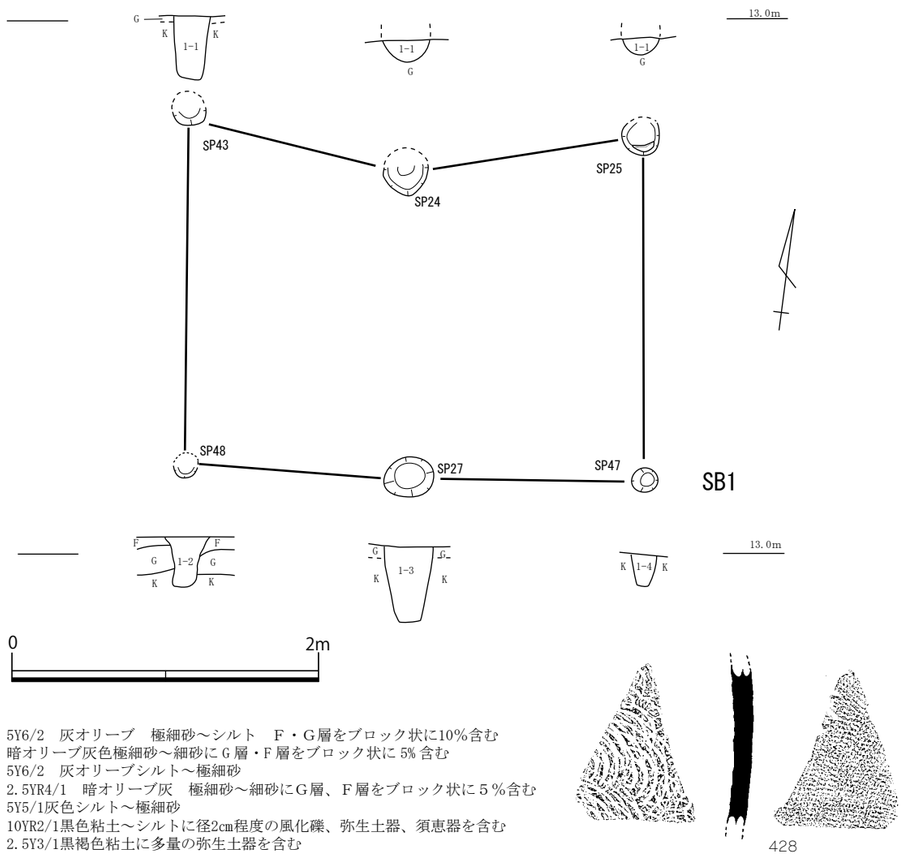


Fig.24　SB １平・断面図（縮尺＝遺構１/40，土器１/ ４）

（３）溝（Fig.25・26）

調査区西側を中心に８本の溝を検出した。いずれも上面が削平されたのか，残存する深度は極めて浅い。遺構面まで重機掘削を行っているため，調査時に削平した部分があるかもしれないが，調査時の所見として遺構を認識してからの重機掘削は行っていないため，本来の遺存状況と大きくはかけ離れてはいないものと考えられる。ＳＤ１～７は方向をそろえて平行しており，埋土もほぼ同一であることからほぼ同時期に機能したものと考えられる。溝の方向は座標方位に対しておよそ北 15 度西（Ｎ 15° W）ずれている。溝幅が狭く，非常に浅いという特徴があり，耕作にともなう鋤溝の可能性も考えられる。

ＳＤ１　調査区の西北で検出した溝で，最大長約 6.1 m，最大幅約 0.3 mを測り調査区外へさらに伸びる。第１遺構面を基盤層とし，深度は約 0.02 mほどである。ＳＤ２と連続する同一の溝であった可能性も考えられる。出土遺物としては須恵器の壺口縁部がある（429）。その他，須恵器片および土師質土器片を少数検出した。土師質土器は弥生土器片の可能性が高いが小片であり，詳細は不明である。溝の基盤層はその堆積時に下層の自然河川の遺物を比較的多く混入しているものとみられ，遺構出土遺物にも下層出土の弥生土器が混入しているものと考えられる。

ＳＤ２　ＳＤ１の南側に連続して検出した溝である。全長約 2.8 m，最大幅 0.2 m，深度 0.04 mを測り，遺構埋土は他の溝と同様にぶい黄褐色極細砂～細砂である。土師質の土器細片を含むが細片であり詳細は不明である。

ＳＤ３　北拡張区西端付近で検出した溝である。最大長 6.8 m，最大幅約 0.3 mを測り，調査区外に続く。南端付近で浅い段をもち深くなるが，最深部でも約 0.02 mを測るのみである。430 は須恵器杯の口縁部である。口径は 18.0cm を測る。その他須恵器甕の体部片と土師質土器の細片が出土した。図示していないが，須恵器甕は内面に青海波紋，外面に格子状叩きを明瞭に残す個体である。

ＳＤ４　ＳＤ３の南側に連続して掘削された溝である。ＳＤ３と近接しており，本来はＳＤ３と一連の溝であった可能性も考えられる。全長は約 2.3 mを測り，埋土はにぶい黄褐色極細砂～細砂である。小片であり図化できなかったが，須恵器杯の口縁部と土師質の土器質の土器細片および石鏃（Ｓ４）が出土した。石鏃は小型の無茎式であり，長さ 1.9cm を測る。左右非対称であり，側縁の片側は欠損している可能性がある。

ＳＤ５　ＳＤ３の東，ＳＤ７の西に位置する溝で，全長約 6.9 m，最大幅 1.0 m，深さ 0.02 mを測る。平面形で東西に張り出しが取り付くような形状を呈する箇所が３箇所程度認められるが，本来の溝の方はより直線的にのびていた可能性が高い。須恵器の甕体部片，椀もしくは杯の底部付近の破片ならびに土師質の土器細片が出土している。

ＳＤ６　ＳＤ５の南側に連続して掘られた溝である。本来ＳＤ５と同一の溝であった可能性も考えられる。南端で急激に幅を細め，調査区外へ伸びる。中央は試掘トレンチによって南北に寸断されているが，平面形の連続性から一連の溝であると判断した。遺物は土師質の土器片が少量出土している。図化できなかったが，弥生土器高杯の可能性が高い破片を含む。ただし，遺構面の遺物出土状況から，この破片によって遺構の所属時期を決定するのは困難である。

ＳＤ７　ＳＤ６の東側で検出した溝である。全長約 3.2 m，最大幅約 0.3 mを測る。ＳＤ８と一連の溝であった可能性も考えられる。須恵器小片と土師質の土器片が出土している。

ＳＤ８　ＳＤ７の南側に位置し，南西方向に弧を描くように延びる溝である。他の溝群を検出し掘削した後の清掃で検出したため，ＳＤ６との切りあい関係は不明である。また，西端は削平されており，さらに西へ続いた可能性が高い。埋土は灰黄褐色極細砂～シルトと他の溝と近

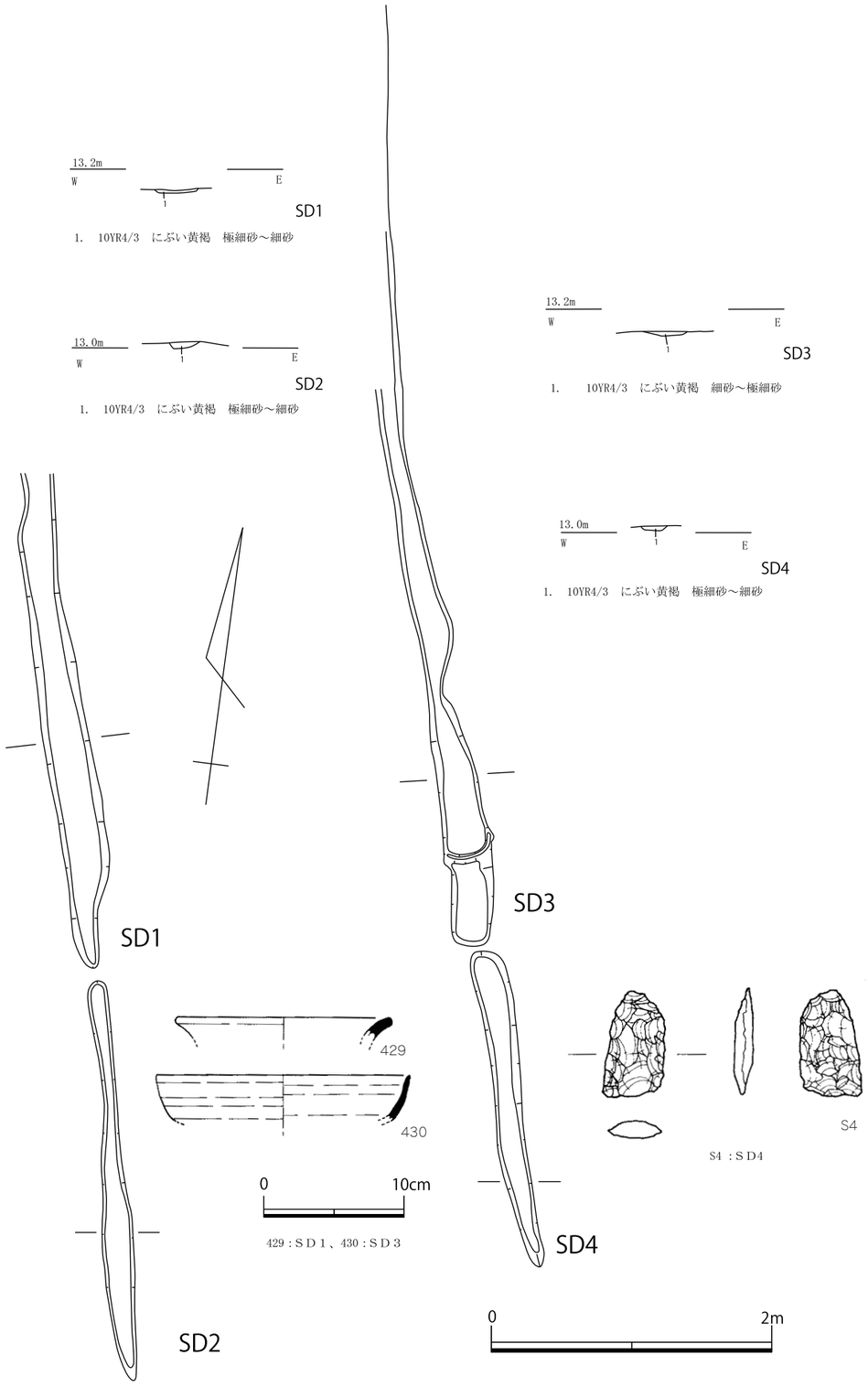


Fig. 25 SD1 ～ 4 平・断面図（縮尺＝遺構＝ 1/40，土器＝ 1/4，石器＝ 1/1）

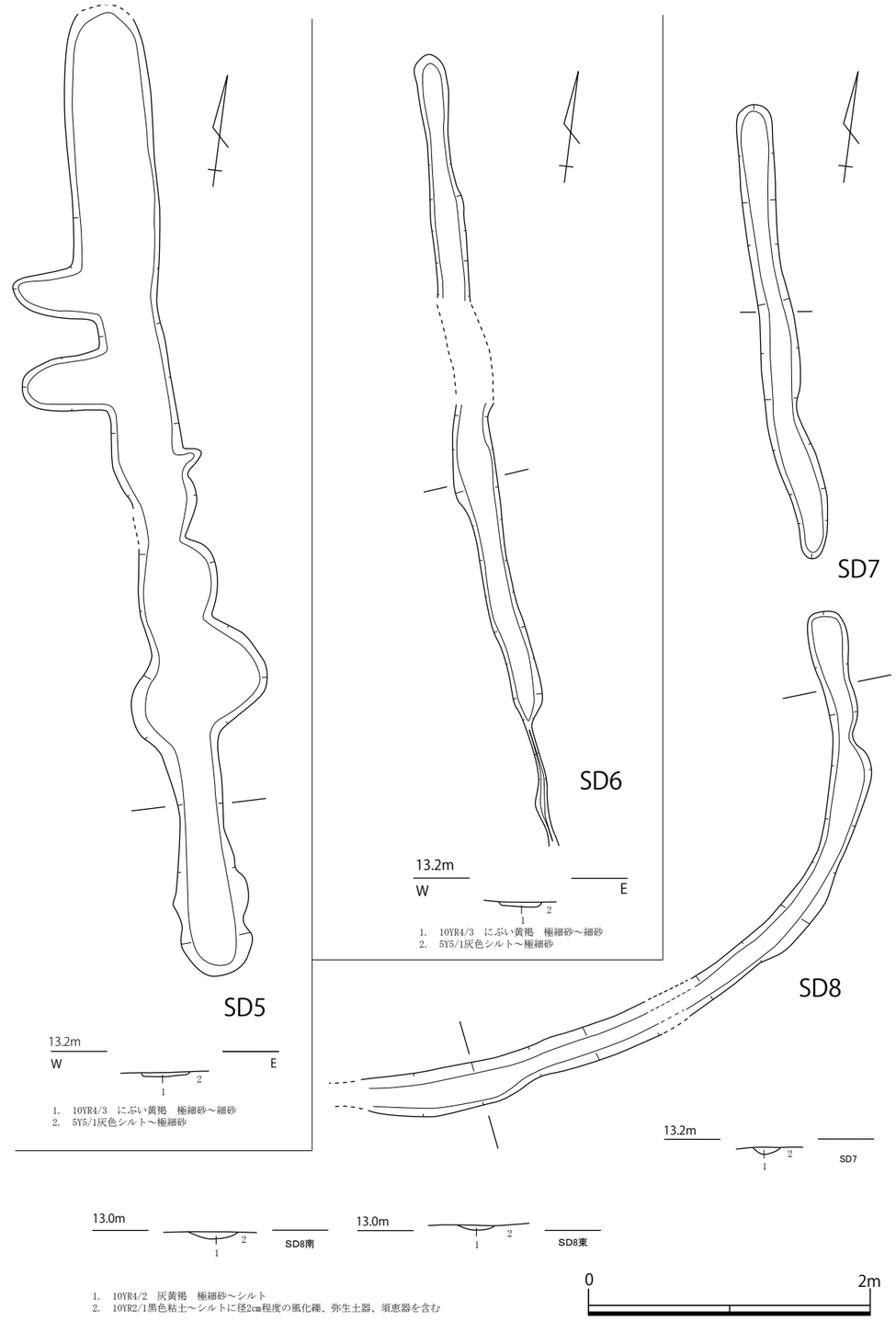


Fig. 26 SD5 ～ 8 平・断面図（縮尺＝遺構 1 /40）

似しており，埋没に大きな時期差はないものと考えられる。須恵器杯の口縁部と土師質の土器細片が出土しているが詳細は不明である。

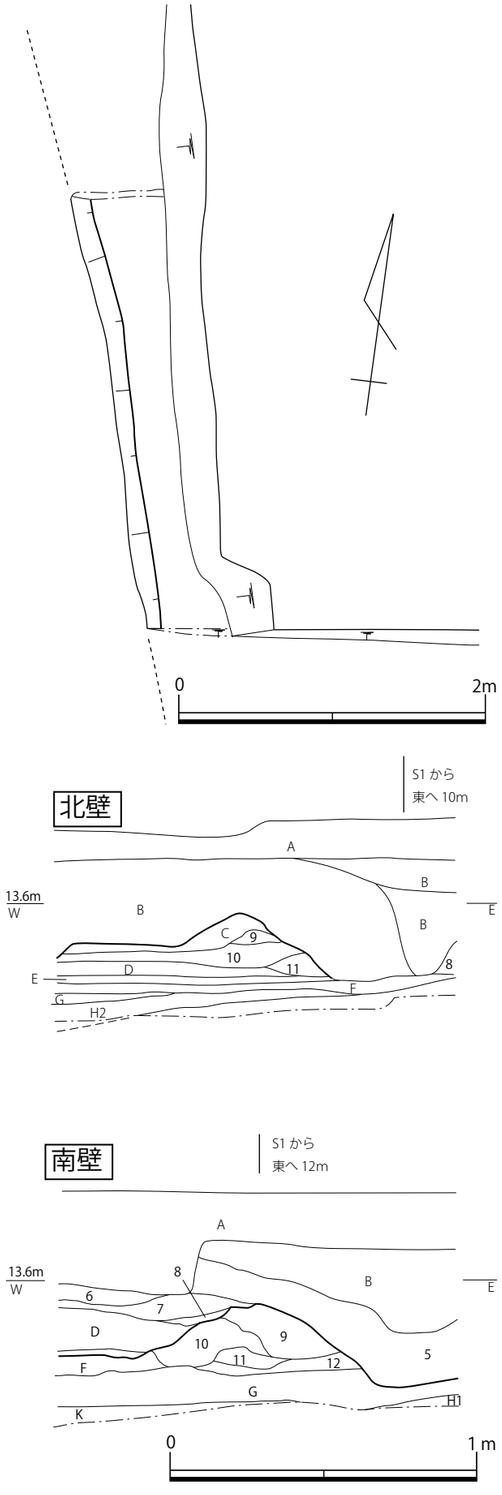
ＳＤ９　ＳＤ５の南西側に位置する小規模な溝である。全長0.5ｍを測るのみであるが，断面形および埋土が他の溝と共通している。土師質の土器細片が出土したが詳細は不明である。

（４）土手状遺構

ＳＸ２（Fig.27）

調査区の南壁・北壁の精査中に検出した遺構である。調査区の掘削時にはその存在を認識することができず，削平してしまったため平面形は不明であるが，北拡張区の掘削に際しては平面的に検出し，溝群と同様，北西方向に約10°傾いて伸びることを確認した。南壁と北壁に対応する堆積層が認められることから，調査区を縦断するかたちで本来は土手状の遺構が存在したものと考えられる。壁面での検出地点を直線的に結ぶと，調査区西半で検出した溝群とほぼ平行する。また川の埋没土の東端付近に位置することから，防水上の機能を有した遺構である可能性が高いと考えられる。西側で検出した溝群が鋤溝であると仮定すると，畦畔であった可能性も考えられる。

堆積状況をみると，黄褐色・黒褐色・灰黄色などのシルトを主体とした土壌を交互に山状に積み上げていることがわかる。土器等は出土していないが，堆積状況から，第１遺構面の堆積層の上面に築かれたことが確実であるので，築造された時期が古代以降であることが明らかである。なお，南壁でこの土手状遺構を縦に裁断するように土壌サンプルを採取し，花粉分析ならびにプラントオパール分析を実施した。結果は第Ⅴ章を参照いただきたい。



※土層番号はそれぞれ調査区北壁・南壁に対応

Fig. 27　土手状遺構平・断面図（縮尺＝１/40）

（４）土坑及びピット（Fig.28）

上記の遺構以外にも土坑およびピットを複数検出しているが，中でも遺物の出土したものを取り上げて報告する。なおＳＡ１・ＳＢ１を構成するピットで遺物が出土したものについては，それぞれの遺構図に掲載している。その他の遺物出土遺構はFig.29にまとめた。

ＳＰ３　調査区北西隅，ＳＤ１の東側で検出したピットである。431は須恵器の杯口縁部である。小片であり口径は不明だが，器厚の薄い口縁部が直線的に外に向かって伸びる。

ＳＰ４　調査区北西隅，ＳＰ３の北東で検出した。土師質の土器細片が出土したが詳細は不明である。

ＳＰ５　調査区北西隅，ＳＰ４の東で検出した。土師質の土器小片が出土したが詳細は不明である。

ＳＰ 12　ＳＤ５の中央西側で検出した。土師質の土器片が数点出土したが詳細は不明である。

ＳＰ 17　調査区西側中央，ＳＤ４の南端付近で検出した。土師質の土器数点を検出した。うち数点はいわゆる白色系の土器であると考えられる。ただ，全て細片であり詳細は不明である。

ＳＰ 20　ＳＡ１の西辺東側で検出した。土師質の土器細片が20点程度出土したが，全て細片で磨耗しており詳細は不明である。

ＳＰ 37　ＳＡ１の東側で検出したピットである。432は須恵器の壺口縁部であると考えられる。小片であり口径は不明である。口縁部が上下に肥厚し，直線的な端部形状を示す。

ＳＰ 38　調査区中央やや東よりで検出した。内面にハケ目の残る土師質の土器小片が出土したが詳細は不明である。

ＳＰ 42　調査区南西隅，ＳＢ１の西側で検出した。土師質の土器小片が出土した。磨耗しており図化不能であるが，杯の口縁部の可能性がある資料を含む。

ＳＰ 59　調査区中央南隅で検出した。土師質の土器片が出土したが，小片で磨耗が著しく詳細は不明である。

ＳＫ３　調査区中央北側でＳＫ１の南側，ＳＫ２の東側で検出した。須恵器と土師質の土器小片が出土したが，詳細は不明である。

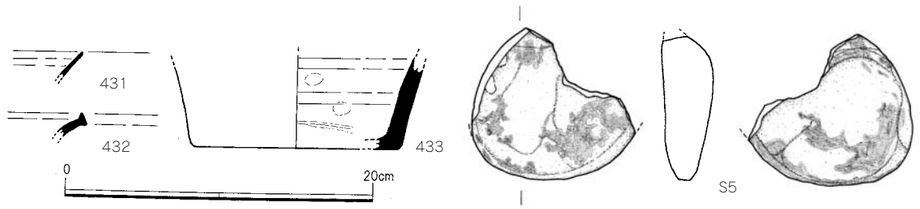


Fig. 28　土坑・ピット出土遺物（縮尺＝１/4）

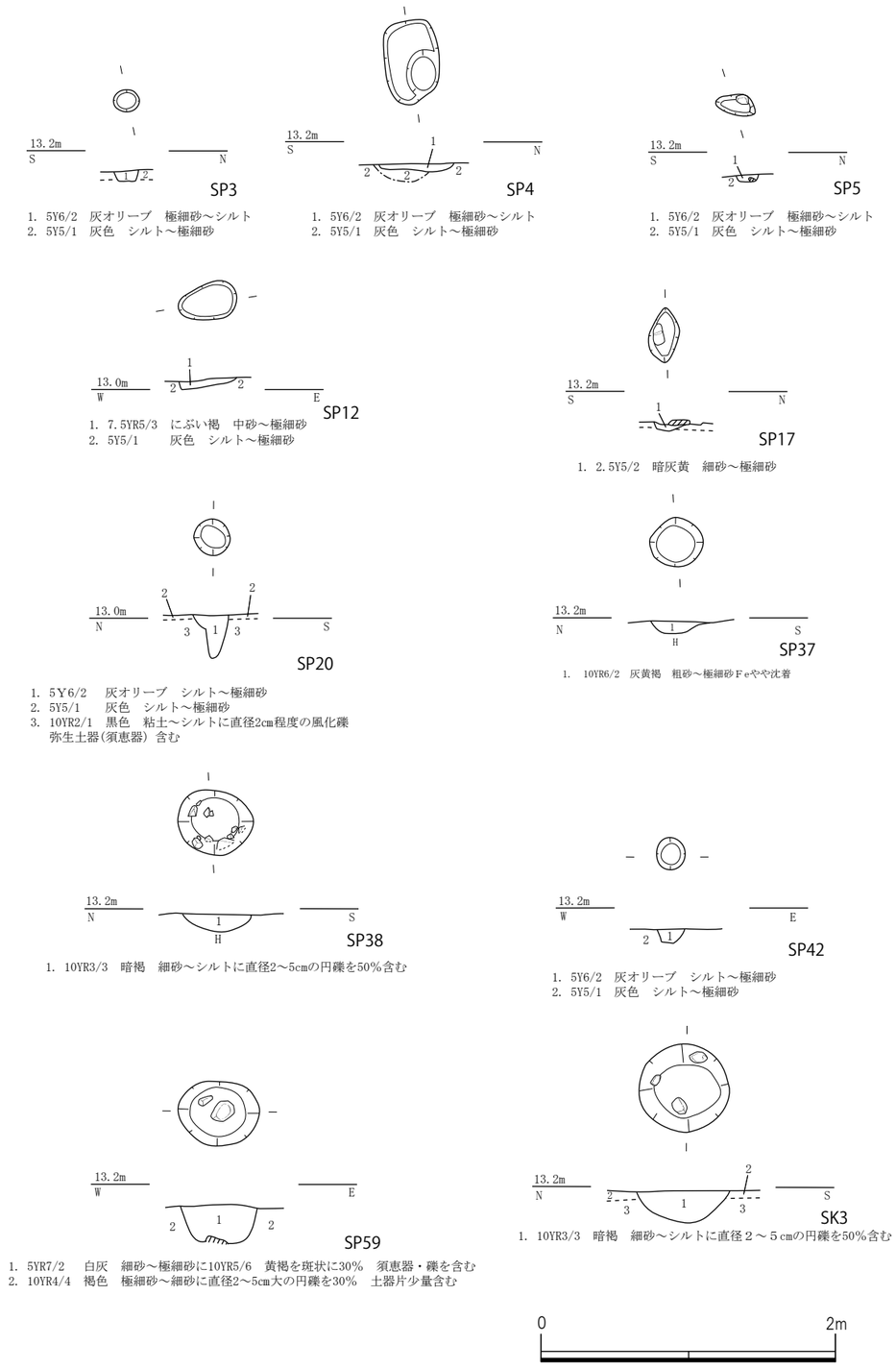


Fig.29　土坑・ピット平・断面図（縮尺＝１/40）

小結　まず，遺構面である第１遺構面（Fig. 5 － F 層）の形成時期を検討してみたい。弥生土器は下層からの混入であると考えられる。出土遺物の中で主体を占める須恵器を見ると，型式学的特徴からある程度の時期幅をもつことがわかる。古墳時代的な杯身が残存することから上限は７世紀後半に求められる可能性が高い。一方，本層からは１点であるが緑釉陶器の底部片も出土している。底部片のみであり，詳細な時期比定は困難であるが，底部が削出の円盤状高台で，白色系の素地に釉調が淡緑色を呈すことから，９世紀代の資料である可能性が高い。その他にも１点のみであるが，焙烙も出土している。ただし，この資料は調査時の所見から，近代の撹乱層中にあったものが調査中に混入したものである可能性が高い。従って，主体となるのは７世紀代の須恵器であり，本遺構面の形成時期は概ね７世紀代を中心とし，９世紀代を下限とするものと考えられる。

古代に属するとして報告した遺構は，すべて遺構内からの良好な出土遺物に恵まれず，詳細な時期比定が困難である。出土遺物からその遺構面の形成時期が古代で概ね理解できるが，それ以上の特定はできなかった。

〈主要参考文献〉

佐藤竜馬 1997「７世紀讃岐における須恵器生産の展開」『財団法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要』Ⅴ - 特集７世紀の讃岐 -（財）香川県埋蔵文化財調査センター

佐藤竜馬 2001「讃岐における７世紀の須恵器」『古代の土器研究』３　ミニシンポジウム四国と岡山の７世紀の土器　第 86 回研究会報告　古代の土器研究会

信里芳紀 2002「小谷窯跡出土須恵器の編年」『小谷窯跡・塚谷古墳』高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（財）香川県埋蔵文化財調査センター

高橋照彦 2003「平安京近郊の緑釉陶器生産」『古代の土器研究　平安時代の緑釉陶器－生産地の様相を中心に－』古代の土器研究会第７回シンポジウム資料

第３節　　近世以降（Fig.31）

調査区中央から東にかけて，大規模削平を免れた一部の地点でいくつか遺構を検出した。いずれも出土遺物が細片であり，時期決定が可能なものではないが，ここで報告する。

（１）土坑（Fig.30）

ＳＫ１　調査区中央北側で検出した土坑である。最大幅 0.6m，深さ 0.2 ｍを測り，埋土は暗褐色シルト～細粒砂で円礫を多く含む。陶磁器片が一片出土しているが，小片であり詳細は不明である。

ＳＫ２　調査区中央北側，ＳＫ１の南側で検出した土坑である。深さ 0.1m とやや浅い。SK １と同質の埋土であり，土師質の土器小片と陶磁器片が出土したが，詳細は不明である。

ＳＫ４　ＳＸ１の南に近接して検出した土坑である。上部は撹乱により大きく削平をうけており，深さ５cm 程度しか残存していない。埋土中より瓦片が出土した。

ＳＫ５　調査区中央東よりで検出した土坑である。平面形は短辺 0.4 ｍ，長辺 0.6 ｍの隅丸長方形を呈し，埋土はにぶい黄褐色細粒砂～極細粒砂である。円礫を少量含む。433 は須恵器の壺底部である。Ｓ５は不明石材である。片面がやや窪んでおり，台石ないし柱穴の根石の可能性も考えられる。被熱しており，内外面ともに黒色の炭化物が付着している。その他遺物は土師質の土器小片に混じり，陶磁器片を数点検出したが，細片であり詳細は不明である。

（２）不明遺構（Fig.30）

ＳＸ１　調査区東側の，近代以降の撹乱層除去中に検出した遺構である。土師質風呂釜の破片（434）が出土したことと，検出状況で風呂釜を支える裏込めとして機能していたと考えられる粘土～シルト層を検出したことから，風呂跡であると考えられる。撹乱によって削平された状況であった。

小結

調査区は全体的に近代に入って以降大きく削平を受けており，特に調査区東半はその痕跡が顕著である。撹乱層除去中に近世に所属すると考えられる遺物をいくつか検出している。遺構の掘削深度が深いものが部分的に削平を免れたものである。遺構が残存しているのはＳ１から東に 15 ～ 18 ｍの微高地上に限られており，この範囲が近世以降の遺構が集中する地点であると言えるが，撹乱の規模を考えると本来はさらに東西にも広がっていた可能性が高い。

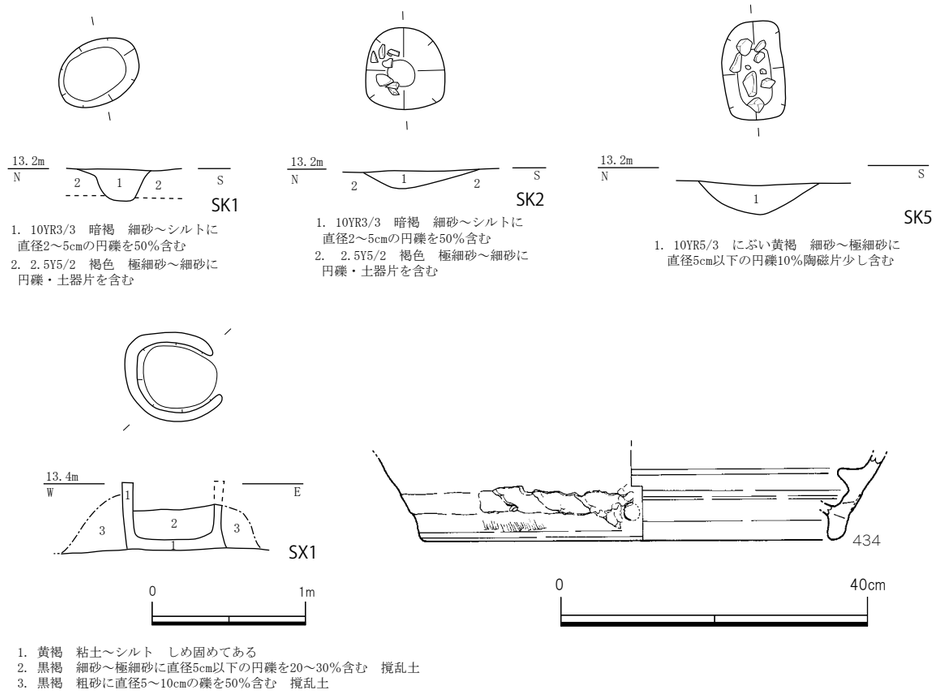


Fig.30　近世以降遺構平・断面図（縮尺＝１/40）

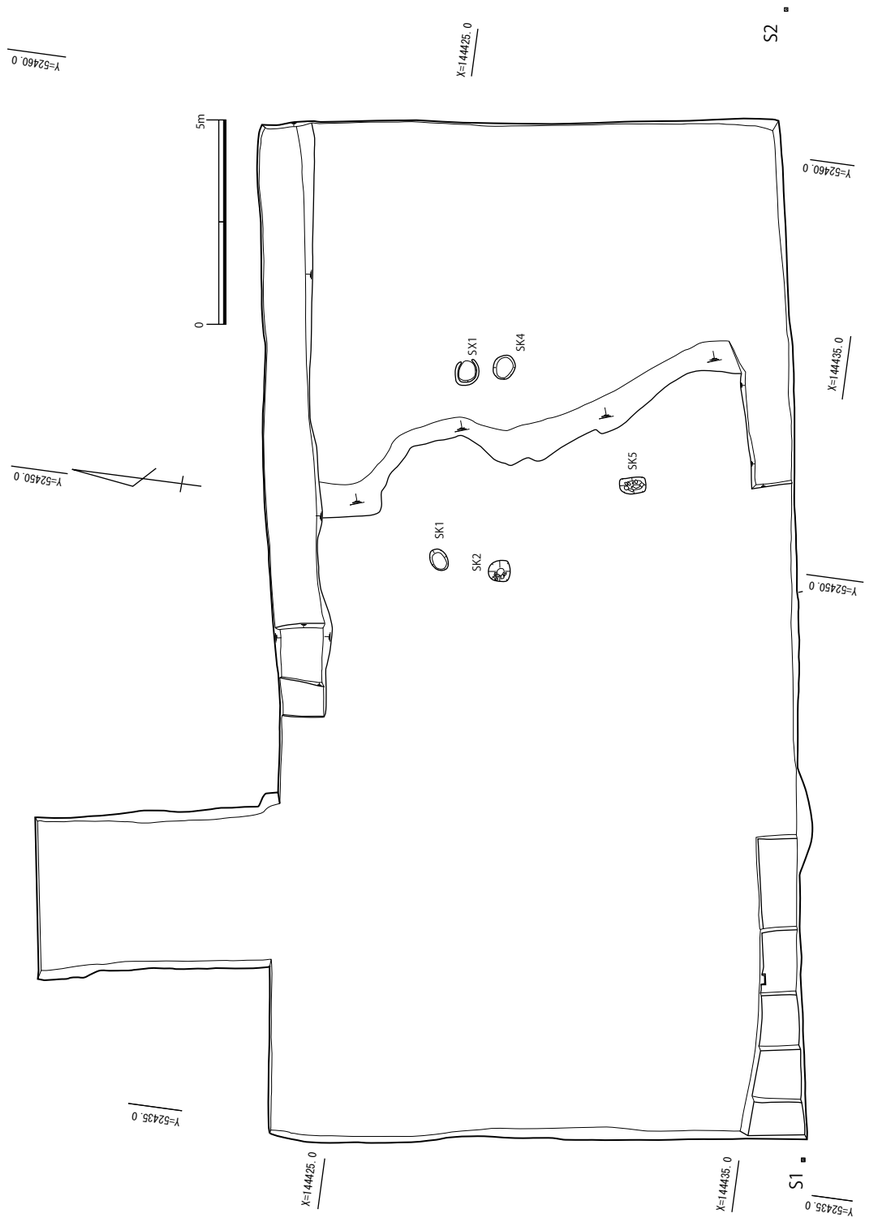


Fig.31　近世以降遺構配置図（縮尺＝１/150）

第Ⅴ章　　自然科学的分析

Ｓ１から東へ12ｍの地点の調査区南壁壁面を柱状に削り出し，土壌のサンプル採取を行った。土壌サンプルの中でも特に自然河川の堆積層（Fig. ５－Ｇ・Ｋ層）と土手状遺構SX ２の構築土（10層・12層）を対象に，自然科学分析を委託した。周辺の古環境の復元と，稲を含む植物栽培の痕跡を明らかにすることが目的である。結果を以下に記す。

第１節　プラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO ２）が蓄積したものであり，植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネの消長を検討することで水田跡（稲作跡）の検証や探査が可能である（藤原・杉山，1984，杉山，2000）。

２．試料　　分析試料は，Fig. ５－10層，12層，Ｇ層，Ｋ層から採取された計４点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

３．分析法　プラント・オパール分析は，ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて，次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１ｇに対し直径約40μｍのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μｍ以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は，400倍の偏光顕微鏡下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に，計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。

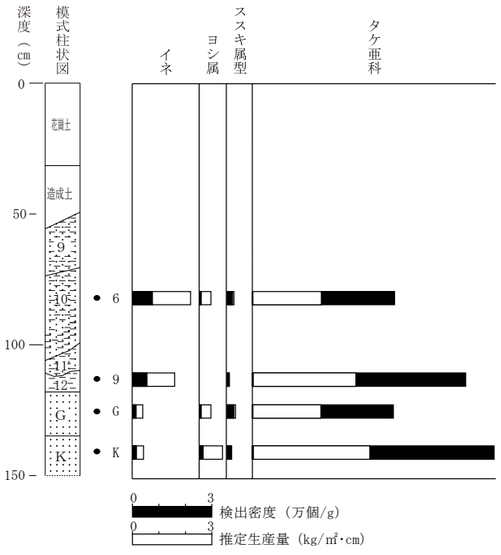


Fig.32　林宗高遺跡におけるプラント・オパール分析結果

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10－５g）をかけて，単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより，各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。

４．分析結果

プラント･オパール分析では，イネ，ムギ類（穎の表皮細胞），ヒエ属型，ヨシ属，ススキ属型，タケ亜科の主要な６分類群について同定・定量を行っている。分析結果を表１および図１に示し，主要な分類群の顕微鏡写真を写真図版に示す。

５．考察

（１）稲作跡の検討

稲作跡の検証や探査を行う場合，一般にイネのプラント・オパールが試料１ｇあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に，そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし，密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから，ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

10層，12層，Ｇ層，Ｋ層について分析を行った。その結果，すべての試料からイネが検出された。このうち，10層と12層では密度が7,600個/gおよび5,500個/gと高い値である。これらの層は土手状遺構の構築土であることから，遺構構築の際に耕作地の土壌が利用された可能性が考えられる。

Ｇ層とＫ層では，密度が1,300個/gおよび1,400個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては，稲作が行われていた期間が短かったこと，土層の堆積速度が速かったこと，採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと，および上層や他所からの混入などが考えられる。

（２）イネ科栽培植物の検討

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには，イネ以外にもムギ類やヒエ属型（ヒエが含まれる）などがあるが，これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

（３）堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し，ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから，これらの植物の出現状況を検討することによって，堆積当時の環境（乾燥･湿潤）を推定することができる。イネ以外の分類群では，各層ともタケ亜科（おもにネザサ節型）が多く検出され，ヨシ属は少量である。おもな分類群の推定生産量によると，各層ともタケ亜科が優勢となっている。

以上のことから，各層の堆積当時はメダケ属（ネザサ節）などの竹笹類が多く生育する比較的乾燥した環境であったと考えられ，部分的にヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたと推定される。

6．まとめ

プラント・オパール分析の結果，10層と12層ではイネが多量に検出された。これらの層は土手状遺構の構築土であることから，遺構構築の際に耕作地の土壌が利用された可能性が考えられる。また，G層とK層では，少量ながらイネが検出され，調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。

各層の堆積当時は，メダケ属（ネザサ節）などの竹笹類が多く生育する比較的乾燥した環境であったと考えられ，部分的にヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたと推定される。

Tab. 3　林宗高遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料 6	9	G	K
イネ	*Oryza sativa*	76	55	13	14
ヨシ属	*Phragmites*	7		7	14
ススキ属型	*Miscanthus* type	21	7	26	14
タケ亜科	Bambusoideae	545	818	541	927

推定生産量（単位：kg/m²·cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa*	2.23	1.60	0.39	0.42
ヨシ属	*Phragmites*	0.44		0.42	0.90
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.26	0.08	0.33	0.18

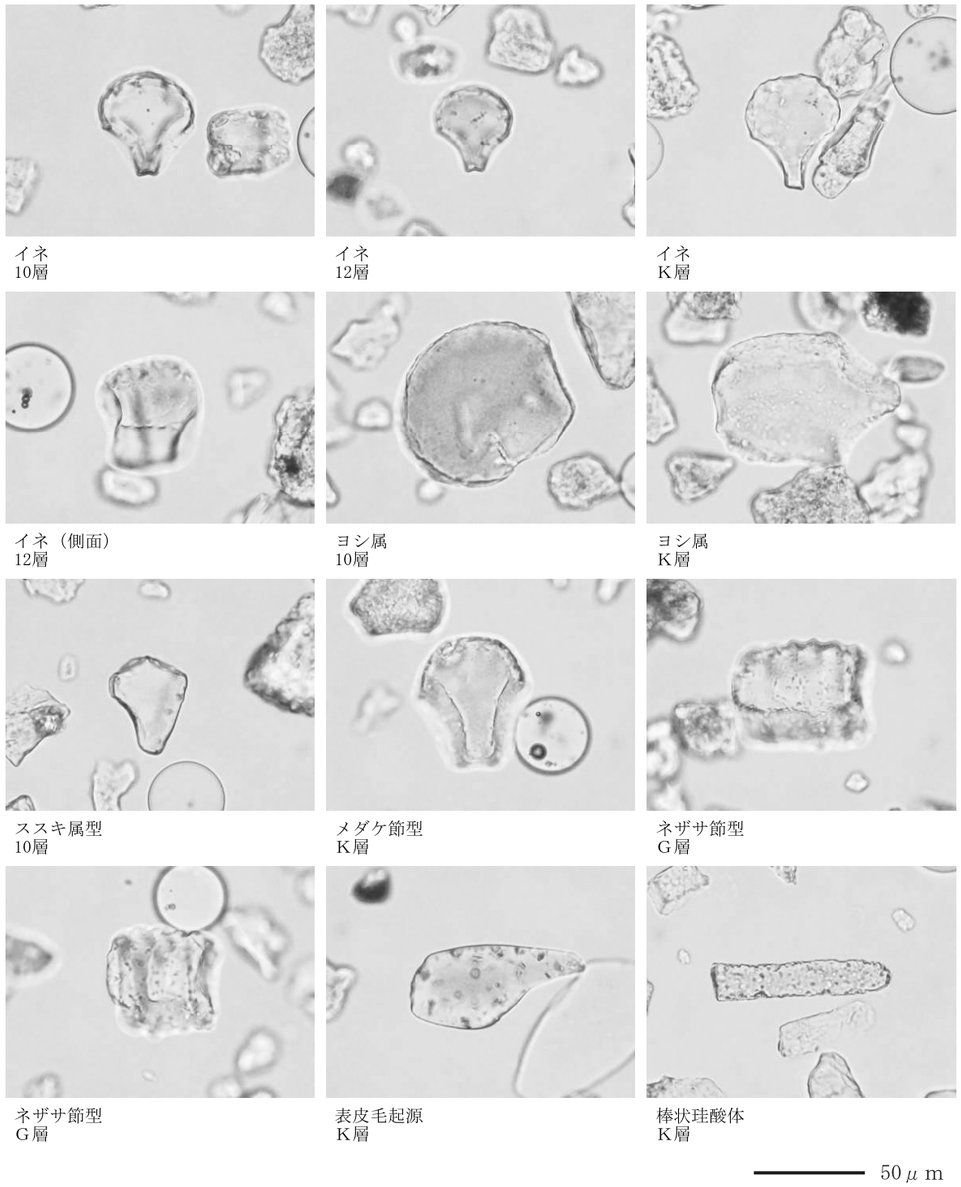
文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) －数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) －プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

PL. 3　林宗高遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）



第２節　花粉分析

１．はじめに

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は，水成堆積物では保存状況が良好であるが，乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

２．試料

分析試料は，Fig. 5 － 10 層，12 層，Ｇ層，Ｋ層から採取された計４点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。これらは，植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

３．方法

花粉の分離抽出は，中村（1967）の方法をもとに，以下の手順で行った。

１）試料から１cm3 を採量
２）0.5％リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎
３）水洗処理の後，0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法で砂粒を除去
４）25％フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
５）水洗処理の後，氷酢酸によって脱水し，アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）
６）再び氷酢酸を加えて水洗処理
７）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し，グリセリンゼリーで封入しプレパラート作成
８）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行った。花粉の同定は，島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類し，複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については，中村（1974，1977）を参考にして，現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが，個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

４．結果

（１）分類群

出現した分類群は，樹木花粉 15，樹木花粉と草本花粉を含むもの２，草本花粉 20，シダ植物胞子２形態の計 39 である。なお，寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。分析結果を表１に示し，花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

モミ属，ツガ属，マツ属複維管束亜属，スギ，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科，ヤナギ属，サワグルミ，ハンノキ属，カバノキ属，クマシデ属－アサダ，シイ属，ブナ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ニレ属－ケヤキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科，マメ科

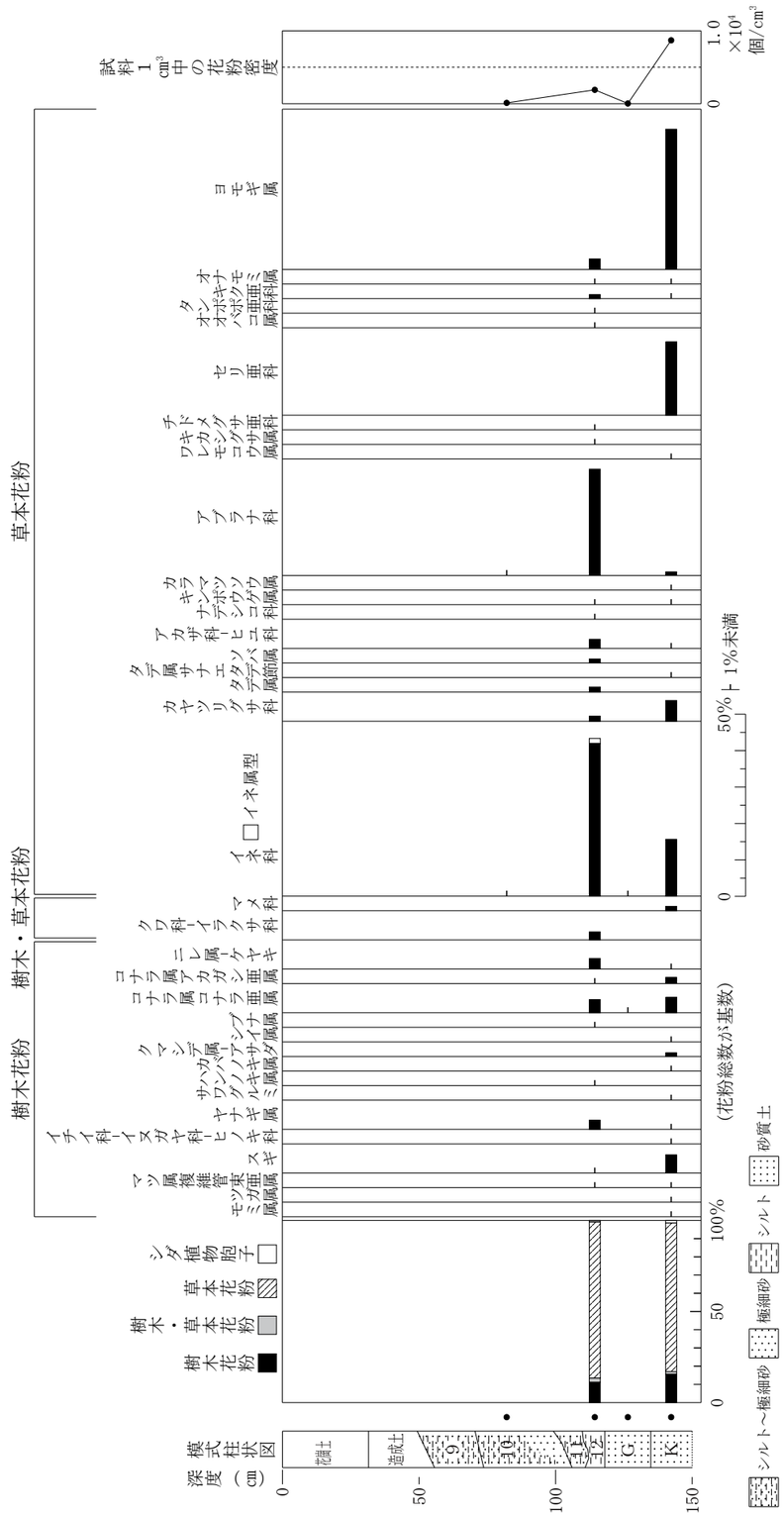


Fig. 33　林宗高遺跡における花粉ダイアグラム

〔草本花粉〕

イネ科，イネ属型，カヤツリグサ科，タデ属，タデ属サナエタデ節，ソバ属，アカザ科－ヒユ科，ナデシコ科，キンポウゲ属，カラマツソウ属，アブラナ科，ワレモコウ属，キカシグサ属，チドメグサ亜科，セリ亜科，オオバコ属，タンポポ亜科，キク亜科，オナモミ属，ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子，三条溝胞子

（２）花粉群集の特徴

下位のＫ層では草本花粉の占める割合が約 80％を占める。草本花粉ではヨモギ属，セリ亜科，イネ科が優勢で，カヤツリグサ科などが伴われる。樹木花粉ではスギ，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属などが低率に出現する。Ｇ層では花粉密度が低く，樹木花粉のコナラ属コナラ亜属，草本花粉のイネ科がわずかに出現する。12 層では草本花粉の占める割合が約 85％を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む），アブラナ科が優勢で，アカザ科－ヒユ科，ヨモギ属，カヤツリグサ科，ソバ属，タデ属などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属，ニレ属－ケヤキ，ヤナギ属などが低率に出現する。10 層では花粉密度が低く，草本花粉のイネ科，アブラナ科がわずかに出現する。

５．花粉分析から推定される植生と環境

下位のＫ層では，乾燥した環境を好む向陽性草本のヨモギ属，および湿潤な環境などやや多様な環境に生育するセリ亜科，イネ科が優勢であり，カヤツリグサ科も認められることから，堆積地はこれらの草本が生育する草地ないし河川の土手のような環境が示唆される。周囲に森林は少なく，周辺地域にコナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，スギなどが生育していたと考えられる。

Ｇ層では，花粉密度が低いことから，植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては，乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことや，土層の堆積速度が速かったことなどが想定される。

12 層では，栽培植物が含まれるイネ科（イネ属型を含む），アブラナ科が優勢であり，ソバ属も認められた。同層は土手状遺構の構築土であることから，遺構構築の際に耕作地の土壌が利用された可能性が考えられる。なおアブラナ科には，アブラナ（ナタネ），ダイコン，ハクサイ，タカナ，カブなど多くの栽培植物が含まれている。

10 層では，花粉密度が低いことから，植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては，前述のようなことが考えられる。

〔文献〕

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について，とくにイネ（Oryza sativa）を中心として . 第四紀研究 ,13,p.187-193.

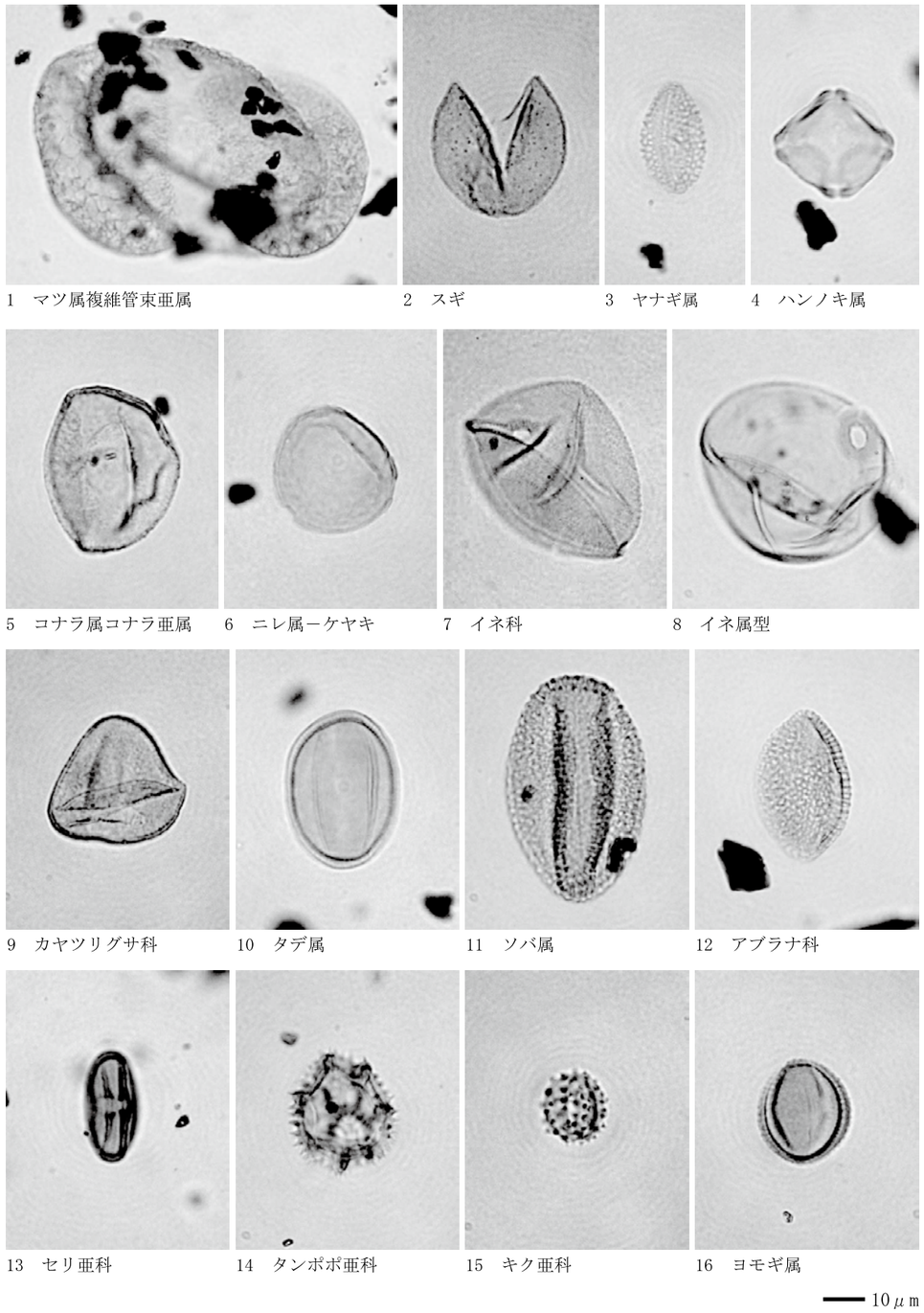
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第 10 号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.

Tab.　4　林宗高遺跡における花粉分析結果

分類群					
学名	和名	10層	12層	Ｇ層	Ｋ層
Arboreal pollen	樹木花粉				
Abies	モミ属				3
Tsuga	ツガ属				3
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属		2		2
Cryptomeria japonica	スギ		1		20
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科				3
Salix	ヤナギ属		7		1
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ				1
Alnus	ハンノキ属		1		
Betula	カバノキ属				1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属−アサダ				4
Castanopsis	シイ属				1
Fagus	ブナ属		1		
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属		10	1	17
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属		1		7
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属−ケヤキ		8		1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科−イラクサ科		6		
Leguminosae	マメ科				5
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Gramineae	イネ科	1	116	2	63
Oryza type	イネ属型		4		
Cyperaceae	カヤツリグサ科		4		23
Polygonum	タデ属		4		
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節				1
Fagopyrum	ソバ属		3		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科−ヒユ科		7		1
Caryophyllaceae	ナデシコ科		2		
Ranunculus	キンポウゲ属		1		1
Thalictrum	カラマツソウ属				2
Cruciferae	アブラナ科	17	81		4
Sanguisorba	ワレモコウ属				1
Rotala	キカシグサ属		1		
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科		1		
Apioideae	セリ亜科				81
Plantago	オオバコ属		2		
Lactucoideae	タンポポ亜科		2		
Asteroideae	キク亜科		3		1
Xanthium	オナモミ属		1		1
Artemisia	ヨモギ属		8		155
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子				5
Trilate type spore	三条溝胞子		2		1
Arboreal pollen	樹木花粉	0	31	1	64
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	6	0	5
Nonarboreal pollen	草本花粉	18	240	2	334
Total pollen	花粉総数	18	277	3	403
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	1.1×10^{2}	1.9×10^{3}	3.0×10	8.7×10^{3}
Unknown pollen	未同定花粉	1	10	2	9
Fern spore	シダ植物胞子	0	2	0	6
Helminth eggs	寄生虫卵	(−)	(−)	(−)	(−)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)	(−)
Charcoal fragments	微細炭化物				(+)

PL. 4　林宗高遺跡の花粉



第Ⅵ章　　まとめ

第１節　古代の遺構と調査地付近の地割

調査区の西半を中心に，第１遺構面を基盤層とする遺構を複数検出した。中でも，溝や柵列跡，掘立柱建物跡など，主軸方向の明らかな遺構を見ると，共通して一定の方角を指向していることがわかる。すなわち，溝群は座標方位に対して北 15° 西（N15° W）傾いた方角を向いており，なおかつ，SD １・２と３・４，５・６は，東西方向にそれぞれ約 2.5 mずつを隔てて等間隔に位置する。SD ８は例外的に円弧を描く形状になっているが，他の溝は全て先述の方向を向き，平行している。掘立柱建物 SB １や，柵列跡 SA １も，長軸方向を東西にとるものの，溝群にほぼ直交するかたちで配置している。こうした土地利用の背景には何らかの規制要因が存在したとみるのが妥当であろう。堆積状況や切りあい関係，出土遺物からは，溝群とこれら建物との時間的併行関係を確定することはできないが，当地の土地利用にあたり，一定の方角的な規制が存在したことは明らかである。

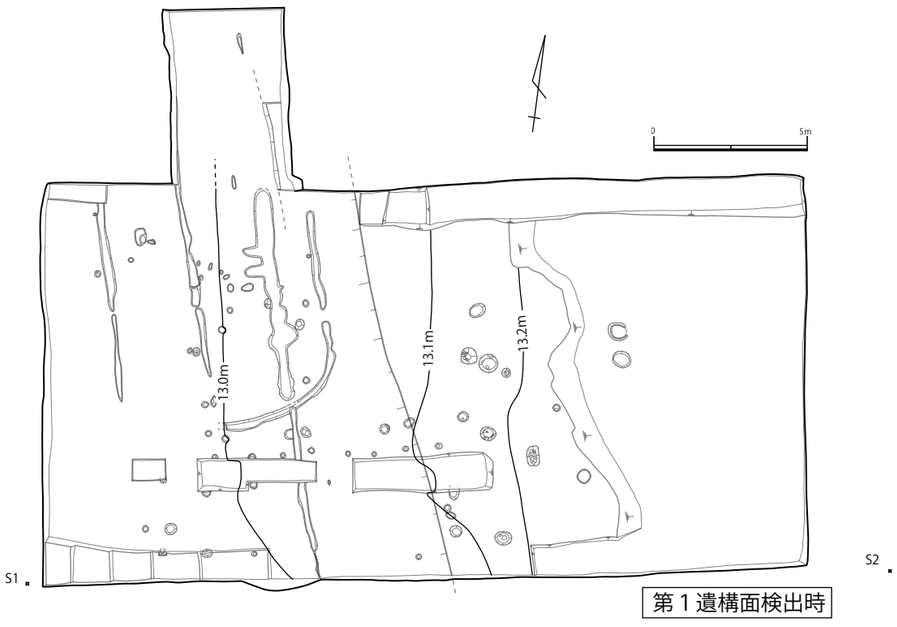
古代の高松平野における土地利用の規制要因について，まず想起されるのは条里地割である。林宗高遺跡の立地する高松平野の中央部における条里地割については，過去多くの研究がなされているところである。それらの研究によると，高松平野の条里地割はＮ９～12° Ｅ傾くことが指摘されている（金田 1992）。実際の発掘調査の成果でも，林宗高遺跡近辺では空港跡地遺跡，讃岐弘福寺領比定地，松林遺跡，天満・宮西遺跡などで，条里地割に沿った土地利用の痕跡が窺われる。

今回の調査で検出した遺構の長軸方向と条里地割の方角を比較してみると，角度にして約 25° ずれていることがわかる。遺構面出土の遺物から，第１遺構面上の遺構の時期が概ね古代の範疇で捉えることができることが明らかであるが，当該期には既に高松平野の他の地点では施行されていた条里地割が，今回の調査範囲では遵守されていないことになる。こうした現象の原因の一つとして，自然地形による規制が考えられる。前述の溝や掘立柱建物は，旧河道 SR1 が埋没し，平坦面が形成された後に開削されたことが明らかになったが，遺構の主軸方向と旧河道 SR １の方向が概ね一致することが指摘できる。本調査地の東側 300 mの地点で実施された宗高坊城遺跡の調査（小川・山元編 2004）でも，条里地割とは主軸を違える遺構が検出され，自然地形の規制による可能性が指摘されている。

本調査地で検出した旧河道 SR １は，最大流域幅が 20 m以上を測る河川であり，埋没した後も土地利用に際して何らかの規制要因となったものと考えられる。古代の遺構はこの河川が埋没した後に形成されたと考えられるが，こうした地形的環境により，例外的に条里地割を指向しない土地利用がなされたものと推測できる。ただし，周辺での調査密度はいまだ低く，調査の進展を待ち確定したい。

参考文献

金田章裕 1992「高松平野の条里と弘福寺領讃岐国山田郡田図」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会
小川賢・山元敏裕編 2004『宗高坊城遺跡』高松市教育委員会



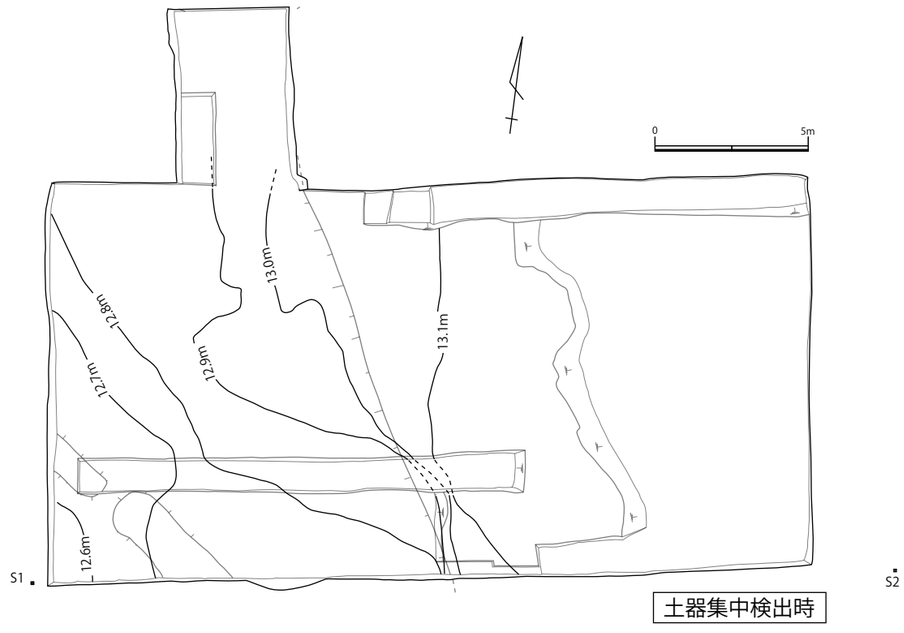


Fig.34　調査区の標高と地形の変化（縮尺＝ 1/300）

第２節　土地利用の変遷

今回の調査では，旧地形の復元の手掛かりとなる情報を入手することができたため，ここで順を追って述べる。

（1）弥生時代

本遺跡で最も古い生活の痕跡が検出できるのは，弥生時代後期後葉である。調査区の西半で，旧河道 SR １下層を検出した。埋没土と出土遺物から，弥生時代後期後葉にかけて，一度埋没したことが判明している。検出面には，細かいクラックが無数に入り，その隙間に砂礫が多く堆積していたことから，地表面に一度露出して干上がった時期があったことが窺われる。調査区の東半では，砂礫層が細かい単位で堆積する様子を検出した。遺構，遺物ともに検出されていないため，弥生時代当時に対応するのがどの層であったか厳密に確認する術はないが，調査区西半に流れる旧河道との位置関係と砂礫層からなる堆積状況から，埋没中州・埋没自然堤防で微高地をなすものと考えられる。検出した旧河道の川底の標高は 12.2 mであり，微高地の上面である Fig. 5 － H １層の最高所の標高は 13.2m を測る。以上から，調査区西側には北西方向に流れる旧河道が存在し，東側は微高地を形成していたものと考えられる。

当該期の集落は検出しておらず，生活域がどの範囲に存在したのか明らかでない。ただし，出土遺物の量から近隣に集落の存在が推測され，その候補地としては調査区東側で検出した微高地上が有力であると考えられる。

本調査後，平成 21 年 12 月 22 日からの林小学校拡張用地造成工事の立会調査において，同時期の弥生土器を包含した黒色粘土層を検出した（Fig.36）。調査範囲が限られるため，範囲や深さ等は不明であるが，調査区西側で検出した自然河川からさらに東に約 60 ～ 100 mの地点に，別の後背湿地ないし埋没旧河道が存在したことが判明した。S １から東へ約 100 mの地点では，この黒色粘土層が緩やかに上がる地点を確認した（Fig.36）。このため，工事立会対象地以東では東に向かって別の微高地が存在したことが推測される。以上の結果から，弥生時代の林宗高遺跡周辺は，複数の微高地が存在し，その微高地と微高地の間に旧河道や後背湿地が存在するという起伏に富んだ地形が復元できる。なお，こうした推定は，（高橋 1992）と矛盾するものではないが，空中写真を基本として復元した高橋の地形復元案と，今回の発掘調査地を重ねたものが，Fig.35 である。高橋の復元を発掘調査によって具体的に明らかにし，部分的に修正することができるものと考えられる。

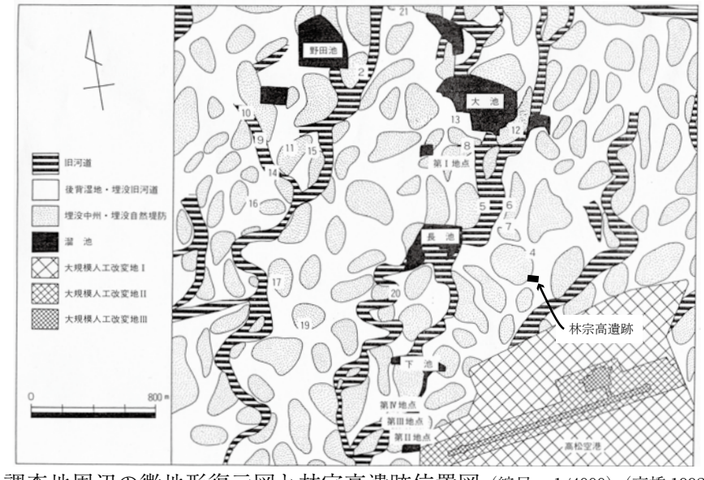
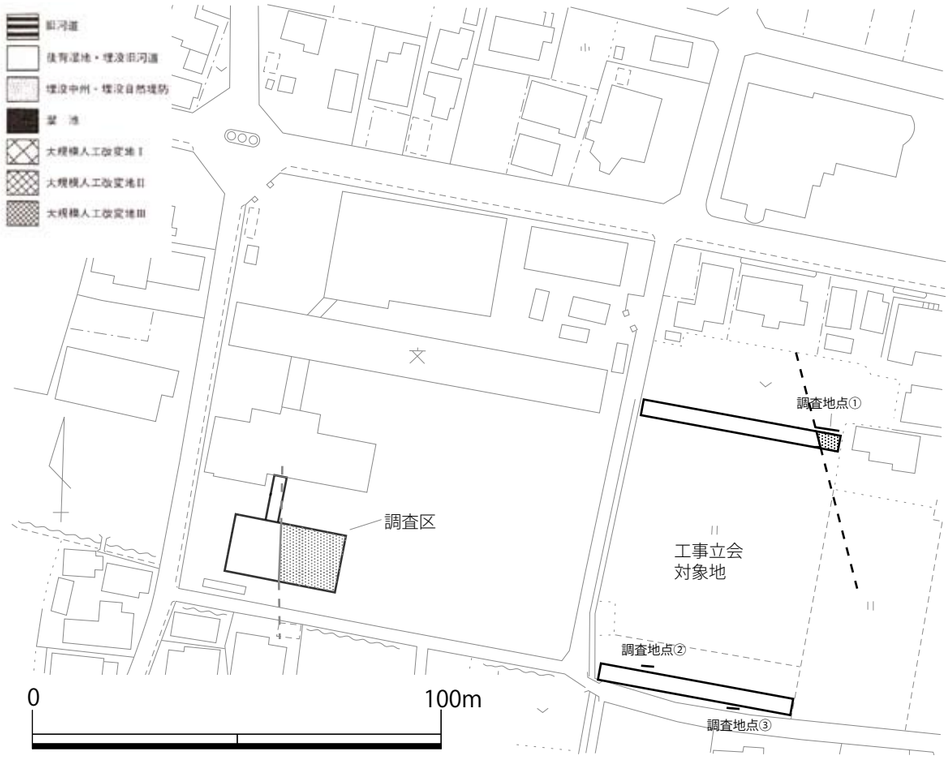


Fig.35　調査地周辺の微地形復元図と林宗高遺跡位置図（縮尺＝ 1/4000）（高橋 1992 に一部加筆）



調査地付近位置図（縮尺＝１/1500)（凡例は高橋1992より）

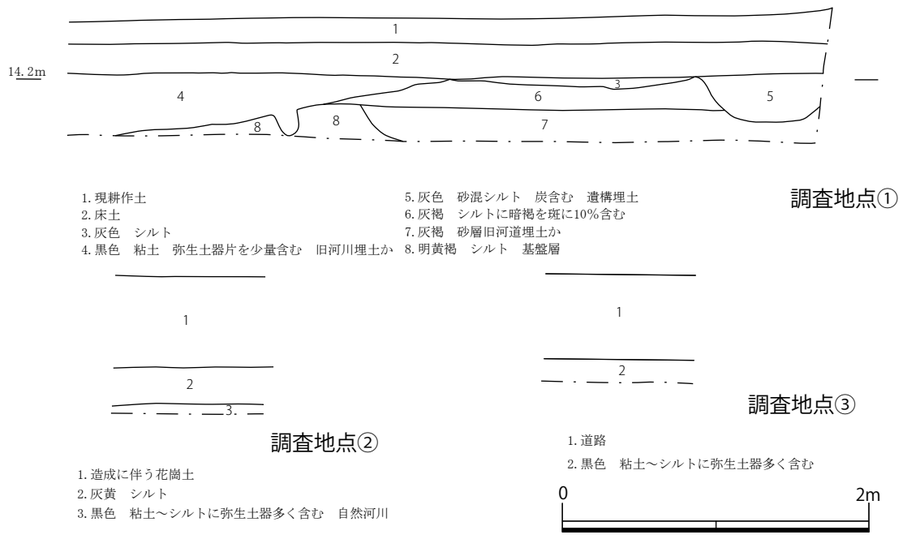


Fig.36　工事立会対象地の調査範囲と調査地周辺の微地形復元

（2）古代

調査区西半の旧河道 SR １が再度埋没し，調査区東側の微高地との比高差が解消され，平坦地が形成されたことが判明した。調査区西端の第１遺構面の上面が標高 13.0 m，調査区中央で検出した微高地の最高所の標高が 13.2 m を測る。遺構の検出状況から弥生時代の旧河道が再埋没して平坦地が形成された後，生活空間として利用されたことが判明した。

前節で述べた通り，ここで検出した遺構は条里地割と一致しない事が指摘できる。自然地形の規制が背景として考えられる。

また，所属時期は不明であるが，古代以降に築造された土手状遺構 SX ２も，概ね旧河道の方位にあわせて造られている。大畦畔等，耕作に関するものか，それとも堤防状の防水機能を果たすものかその役割は不明だが，自然地形を意識した土地利用の痕跡であると考えられる。

調査区東に位置する林小学校拡張用地造成工事に伴う工事立会対象地では，古代の遺構面に対応する層は確認できなかった。須恵器片を１点のみ検出しているため，付近に供給源となる集落が存在した可能性が考えられるが，古代の遺構の東側への広がりは現在のところ不明である。

主要参考文献

高橋学 1992「高松平野の地形環境－弘福寺領山田郡田図比定地付近の微地形環境を中心に－」『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』高松市教育委員会

Tab. 5　出土遺物観察表

＊法量の( )は，残存値を示す。

報文番号	遺構名	区画	種類	器種	法量(cm)			文様・調整		色調		胎土	備考
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	含有物等	
1	撹乱層中	―	土師器	土釜	27.1	(3.4)	－	ﾅﾃﾞ，指頭圧	ﾅﾃﾞ	明褐 7.5YR5/6	明褐 7.5YR5/6	2mm以下の石英・長石を含む	
2	撹乱層中	―	土師器	足釜	－	(8.1)	2.5	脚部底部:ﾅﾃﾞ，板ﾅﾃﾞ	－	にぶい赤褐 2.5YR4/4～にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい赤褐 2.5YR4/4～にぶい橙 7.5YR6/4	3mm以下の石英・長石等を多く含む，金雲母含む	
3	H1層上面	―	須恵器	椀・坏	－	(2.2)	8.6	回転ﾅﾃﾞ，底部:ヘラ切	回転ﾅﾃﾞ	灰白N7/0	灰白N7/0	1mm以下の石英・長石を含む	貼付高台
4	H1層上面	―	陶磁器	鬢盥	－	(4.0)	－	－	－	灰白10Y7/2	灰白N7/0	微細粒をほとんど含まない	
5	H1層上面	―	陶磁器	碗	－	(4.6)	4.6	－	－	胎土:黄灰 2.5Y5/1，釉:灰白 N8/0，オリーブ褐 2.5Y4/3	釉:灰白 N8/0，オリーブ褐 2.5Y4/3	微細粒をほとんど含まない	
6	層位不明	―	弥生土器	二重口縁壺	28.4	(5.4)	－	ﾅﾃﾞ	摩滅	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	3mm以下の石英・長石・雲母を含む	接合痕
7	層位不明	―	弥生土器	高坏	－	(5.4)	－	ﾅﾃﾞ，指頭圧	指頭圧，爪痕	にぶい黄橙 10YR7/2	灰白 10YR8/2	5mm以下の石英・長石を含む	
8	層位不明	―	弥生土器	甑	－	(2.8)	5.6	摩滅	摩滅	灰白 7.5YR8/2	灰白 2.5Y8/1	1mm以下の石英・長石を含む	底部に円孔あり，中心より少しずれた個所にある，
9	層位不明	―	弥生土器	甑	－	(4.7)	－	摩滅	指頭圧のちﾀﾃﾊｹ	灰白 7.5YR8/2	灰白 10YR8/2	1mm以下の石英・長石を含む	底部:穿孔が中心からずれる。
10	層位不明	―	須恵器	坏蓋	－	(4.4)	－	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	灰N6/0	黄灰 2.5Y5/1	0.5mm以下の石英・長石を含む	
11	層位不明	―	須恵器	高坏	－	(7.3)	－	凹線1条	ﾖｺﾅﾃﾞ，しぼり目	灰白N7/0	灰白N7/0	1mm以下の石英・長石を含む	方形透孔2孔
12	SR1下層	N	土師器	土釜	23.0	(2.2)	－	ﾖｺﾅﾃﾞ，摩滅	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 5YR7/4	4mm以下の石英・長石を含む	
13	SR1下層	G	須恵器	坏身	11.8	(4.0)	－	回転ﾅﾃﾞ，回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	灰N6/0	灰N5/0	0.5mm以下の石英・長石を含む	
14	SR1下層	E・J	須恵器	坏身	－	(4.2)	－	回転ﾅﾃﾞ，回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	灰白5Y7/1	灰白N8/0	1mm以下の石英・長石を含む	
15	SR1下層	G	須恵器	坏身	―	(3.5)	－	回転ﾅﾃﾞ，回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	灰白N7/0	紫灰5RP5/1	1mm以下の石英・長石を含む	
16	SR1下層	C	須恵器	坏身	11.6	(3.3)	4.0	回転ﾅﾃﾞ，回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	灰N5/0	灰N5/0	1mm以下の石英・長石を含む	
17	SR1下層	C	須恵器	坏身	－	(3.6)	－	回転ﾅﾃﾞ，回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	灰5Y4/1	紫灰5P5/1	1mm以下の石英・長石を含む	
18	SR1下層	H	須恵器	碗・坏	－	(2.3)	8.0	回転ﾅﾃﾞ，底部:ヘラ切	回転ﾅﾃﾞ	灰N6/0	灰白N7/0	1mm以下の石英・長石を含む	貼付高台
19	SR1下層	O・T	須恵器	碗・坏	－	(1.8)	10.5	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	青灰5B5/1	灰N6/0	1mm以下の石英・長石を含む	
20	SR1下層	O・T	須恵器	壺・鉢	－	(1.8)	8.8	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	灰N6/0	灰白N7/0	0.5以下の石英・長石を含む	底部が極めて平滑な為、ミｶﾞｷを施した可能性があり，ただし単位不明,接合痕
21	SR1下層	H	須恵器	壺	－	(3.6)	－	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	灰白N7/0	灰白N8/0	2mm以下の石英・長石を含む	
22	SR1下層	不明	弥生土器	二重口縁壺	14.4	(2.7)	－	摩滅	摩滅	灰黄褐 10YR6/2	明赤褐 2.5YR5/6	1mm以下の石英・長石を含む	
23	SR1下層	G	弥生土器	二重口縁壺	23.4	(3.0)	－	波状文6本1束1条	ﾅﾃﾞ	灰白5Y7/1	灰5Y6/1	1mm以下の石英・長石を含む	接合痕
24	SR1下層	G	弥生土器	二重口縁壺	20.6	(4.2)	－	摩滅,波状文5本以上1束1～2条	ﾅﾃﾞ	灰白 7.5YR8/2	灰白 10YR7/1	1mm以下の石英・長石を含む	
25	SR1下層	G	弥生土器	二重口縁壺	17.4	(2.7)	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰白 10YR8/2	にぶい黄橙 10YR7/2	1mm以下の石英・長石を含む	
26	SR1下層	G	弥生土器	二重口縁壺	26.0	(2.5)	－	摩滅,櫛描波状文5本以上1束1条	ﾅﾃﾞ	灰褐 7.5YR5/2	にぶい橙 7.5YR7/3	1mm以下の石英・長石を含む	
27	SR1下層	X	土師質土器	二重口縁壺？	－	(2.0)	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙5YR7/8～にぶい橙 7.5YR7/3	橙5YR7/8～にぶい橙 7.5YR7/3	金雲母,微細粒を含む	
28	SR1下層	G	弥生土器	長頸壺	(15.7)	(11.0)	－	ﾅﾃﾞ,ﾀﾃﾊｹのち沈線	ﾅﾃﾞ,指頭圧	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	口縁部はやや歪んでいる可能性あり
29	SR1下層	G	弥生土器	壷	－	(1.5)	－	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	灰白 2.5Y7/1	黄灰 2.5Y6/1	1mm以下の石英・長石を含む	
30	SR1下層	C	弥生土器	壷	－	(1.8)	－	摩滅	摩滅	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/3	1.5mm以下の石英・長石を多量と雲母を含む	
31	SR1下層	G	弥生土器	壷	－	(3.8)	－	ﾅﾃﾞ,ﾀﾃﾊｹ	ﾅﾃﾞ,摩滅	にぶい橙 7.5YR7/3	灰白 7.5YR8/2	0.5mm以下の石英・長石を含む	
32	SR1下層	N	弥生土器	複合口縁壺	19.4	(8.1)	－	ﾅﾃﾞ,ﾀﾃﾊｹのちﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	内面に焼いた時にできた破裂跡あり
33	SR1下層	G	弥生土器	複合口縁壺	24.8	(17.3)	－	ﾅﾃﾞ,ﾀﾃﾊｹ	ﾅﾃﾞ,指頭圧,ﾖｺﾊｹ	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	接合痕
34	SR1下層	X	弥生土器	広口壺	14.8	(8.6)	－	ﾅﾃﾞ,ﾀﾃﾊｹ	ﾅﾃﾞ,指頭ﾅﾃﾞ,指頭圧	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	4mm以下の石英・長石,1mm以下の角閃石を含む	
35	SR1下層	G	弥生土器	広口壺	17.4	(19.4)	－	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾀﾃﾊｹ,ﾀﾃﾍﾗﾐｶﾞｷ,板ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾍﾗｹｽﾞﾘ,指頭圧	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4～橙7.5YR6/6	5mm以下の石英・長石・金雲母・角閃石を含む	
36	SR1下層	A	弥生土器	広口壺	22.3	(25.0)	－	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾀﾃﾊｹのちﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ,指頭圧のちﾅﾃﾞ,指頭圧,ﾖｺﾍﾗｹｽﾞﾘ	橙7.5YR6/6	灰黄褐 10YR6/2	5mm以下の石英・長石・金雲母・角閃石を含む	
37	SR1下層	A	弥生土器	広口壺	13.2	(1.4)	－	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	1mm以下の石英・長石を含む	接合痕
38	SR1下層	G	弥生土器	広口壺	15.6	(1.5)	－	摩滅	摩滅	灰白 2.5Y8/1	灰白 2.5Y8/1	1mm以下の石英・長石を含む	
39	SR1下層	G	弥生土器	広口壺	15.4	(7.1)	－	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾀﾃﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/2	褐灰 10YR6/1	1mm以下の石英・長石を含む	
40	SR1下層	Y	弥生土器	広口壺	13.6	(5.1)	－	ﾖｺﾅﾃﾞ,摩滅	ﾅﾃﾞ,摩滅	にぶい褐 7.5YR5/4	灰褐 7.5YR5/2	2mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む	
41	SR1下層	C	弥生土器	広口壺	14.9	(4.5)	－	ﾅﾃﾞ，指頭ﾅﾃﾞ	摩滅，ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	1mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む	
42	SR1下層	N	弥生土器	広口壺	16.4	(2.1)	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/3	3mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む	
43	SR1下層	M	弥生土器	広口壺	16.2	(5.7)	－	ﾅﾃﾞ,指頭圧	ﾅﾃﾞ,指頭痕	明赤褐 5YR5/6	橙5YR6/6～明赤褐 5YR5/6	3mm以下の石英・長石等と金雲母,角閃石を含む	
44	SR1下層	N	弥生土器	広口壺	15.2	(1.4)	－	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	1mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む	
45	SR1下層	Y	弥生土器	広口壺	15.6	(1.9)	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐 10YR5/4	褐7.5YR4/6	0.5mm以下の石英・長石・雲母を含む	内面に赤色顔料？付着
46	SR1下層	S	弥生土器	広口壺	15.6	(1.3)	－	ﾖｺﾅﾃﾞ?(摩滅)	ﾖｺﾅﾃﾞ?(摩滅)	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	4mm以下の石英・長石を普通,0.5mm程の金雲母を少量含む	
47	SR1下層	S	弥生土器	広口壺	15.6	(3.5)	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7. 5YR6/4	にぶい橙 7. 5YR6/4	2mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む	
48	SR1下層	A	弥生土器	広口壺	15.2	(5.4)	－	ﾀﾀｷ	爪圧痕	橙5YR7/6	橙5YR7/6	2mm以下の石英・長石を含む	
49	SR1下層	G	弥生土器	広口壺	16.0	(1.6)	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰黄褐 10YR6/2	黒褐 5YR2/1	1mm以下の石英・長石・金雲母を含む	
50	SR1下層	S	弥生土器	広口壺	16.8	(2.5)	－	摩滅	ﾅﾃﾞ	にぶい褐 7. 5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	2mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む	
51	SR1下層	G	弥生土器	広口壺	17.4	(1.2)	－	摩滅,ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	褐7.5YR4/4	褐灰 10YR4/1	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	接合痕
52	SR1下層	G	弥生土器	広口壺	16.2	(7.0)	－	ﾅﾃﾞ,ﾀﾃﾊｹ	ﾅﾃﾞ,指頭圧	灰褐 7.5YR5/2	にぶい褐 7.5YR5/3	2mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む	内面に赤色顔料？付着
53	SR1下層	X	弥生土器	広口壺	15.8	(6.5)		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ,指頭ﾅﾃﾞ,絞り目	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	2mm以下の石英,1mm以下の長石・雲母・角閃石を含む	
54	SR1下層	N	弥生土器	広口壺	17.4	(5.3)	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ,指頭圧	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/3	2mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む	
55	SR1下層	N	弥生土器	広口壺	17.4	(6.5)	－	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	指頭圧,ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	4mm以下の石英・長石・金雲母・角閃石を含む	
56	SR1下層	S	弥生土器	広口壺	18.0	(3.3)	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	4mm以下の石英・長石等,金雲母を含む	
57	SR1下層	N	弥生土器	広口壺	18.0	(3.1)	－	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ,指頭圧	褐灰 5YR5/1	褐灰 5YR5/1	3mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む	